

平成27年4月号～平成28年3月号掲載分

次のステージに向けた基盤づくり

支援と交流の促進、
心のつながりを
確かなものに

この時期の復興に向けた主な動き

- H27. 5月 地域防災計画の見直し開始（浪江町防災会議開催）
- 9月 平成27年度浪江町住民意向調査を実施
- 9月 避難指示解除に向けた検証開始（避難指示解除に関する有識者検証委員会開催）
- 11月 浪江産米の販売再開
- 3月 浪江浄化センター（下水処理施設）の復旧が完了
- 3月 浪江町地域スポーツセンターが完成
- 3月 避難指示解除に関する有識者検証委員会が検証結果とりまとめを報告
- 3月 浪江町人口ビジョン、まち・ひと・しごと創生浪江町総合戦略を策定



福島市に「あつまっぺ交流館」がオープン
(5月23日)



なみえ請戸川リバーライン桜まつりが本宮市で復活
(4月18日) (提供：本宮市)



郡山市に「コスモふれあいセンター」がオープン
(7月16日)



佐藤 まみさん(川添)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：2月9日 「平成27年4月 広報なみえ掲載」

子どもの気持ちに寄り添える教師を目指して

日本福祉大学1年生の佐藤さんは、震災後に学校に通えなくなった経験を経て、特別支援学校の教師になりたいという目標に向かって頑張っています。これからやりたいことを笑顔で話すその姿から、しっかりとした強い意志と若いエネルギーが伝わってきました。（今回は役場二本松事務所でお話を伺いました）



▲笑顔で話す佐藤まみさんのこれからが楽しみです

震災当日は中学校の卒業式で、友だちと食事を終えて店を出た時に地震が起きました。幸い家族は無事でしたが両親は職場に向かったため、祖父母と弟との4人で不安な時間を過ごしました。

避難先の高校では馴染むことができず不登校になってしまい、なかなか外にも出られず、言葉さえ交わせない辛い日が続きました。通信制の高校に転校して卒業することができました。現在大学では、こども発達学部心理臨床学科で小さい子や障がい児の勉強をしています。それは、自分が経験したことで

わかる子どもの気持ちを支援する先生になりたいという目標を持ったからです。不登校の時は、うつつが酷くて親にたくさん迷惑をかけてしまいました。愛知県の大学を選んだ理由の一つに、遠く離れて一人で頑張れたら一人前の大人になれると思ったこともありです。

昨年6月に大学でサークルを立ち上げて、復興支援のチャリティ活動を始めました。人との関係、繋がりを大切にしていきたいという意味でReport（ラポール）という名前を付けました。11月の大学祭では食彩工房「鼓馬」さんと一緒になみえ焼そばを販売して、売上金の一部を浪江町に寄付することができました。普段の生活の中では、心無い言葉を掛けられて辛い気持ちになることもありましたが、この活動では愛知の人たちが「頑張ってるね」と言ってくれて募金をしてくれたり、いろいろな人にこういう人がいるのだとわかってもらえたことが良かったと思います。今後は、子どもたちと一緒に歌を作ろうと考えています。それから、福島の仮設になみえ焼そばを作りに行きたいです。

今住んでいるところは半島で海に囲まれています。ゼミで南海トラフについて考えてみようという活動をやっていて、一度スライドショーで講演をしました。次は大学で、震災から今までのことを講演したいと思っています。震災を経験しているからこそ伝えられることを愛知で広めていきたいと思っています。

震災が起きたことで高校は楽しめなかったけど、震災がなかったら大学には行ってなかったと思います。だからチャンスをもらった、勉強させてもらったと考えています。充実感があつて、今がとても楽しいです。

将来の目標は、特別支援学校の教師になること、障がいを持つている子と携わっていくことです。自分が経験したからこそ言えることを伝えたいです。震災を経験した子はナイーブで、少しいくらでも傷つきます。そういうところを支援していきたいと思っています。不登校だったけど、こうやってちゃんとやっていける人がいるから大丈夫だよ。今がダメでもきつと良くなる時があるから、いくらでも直せるから大丈夫だよと伝えたいです。



岡 裕美さん(苅宿) 横山 東沙さん(立野)・熊倉 江理さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：2月28日 「平成27年4月 広報なみえ掲載」

浪江高校陸上部女子は、いつまでもいつまでも、 ずっと仲良しです

今回は、東日本大震災・原発事故発生の直前、3月1日に卒業式を終えたばかりだった、平成22年度浪江高校卒業生3人に集まっていただきました。この中の一人、岡裕美さんは、浪江のころ通信第2号に登場しました。あれから4年経ち、20代になった女性たちに話を聞きました。

集まっていたのは、熊倉江理さんが住む茨城県水戸市。熊倉さんが長女の茉穂ちゃん(生後7か月)を連れてくることになり、梅まつりで賑わう偕楽園の眼前に広がる千波湖畔「好文cafe」でのインタビューとなりました。



岡 裕美さん
福島市在住。今年からスノボを始めました！ライブに行ったりフェスに行ったり休みを楽しんでいます！

◆浪江高校陸上部では、どんな種目を得意にしていましたか？部活や学校の思い出も聞かせてください

岡 長距離です。
横山 マネージャーです。
熊倉 短距離です。
横山 一番印象に残っているのは、2年生の時の高校駅伝です。陸上部の部員が少なく、マネージャーも含めて、みんなで走るようになりました。猪苗代で開催されたのですが、成績はともかく、完走できたのが自慢です。
岡 毎日一緒に、とにかく練習、練習でした。



熊倉 江理さん
水戸市在住。現在は夫と育児奮闘中



熊倉茉穂ちゃん
(生後7か月)

横山 今日ここに来られなかったもう一人の友人も含めて、私たちは幼稚園、小学校から高校まで一緒なんです。特に高校2年3年は、みんな一緒のクラスでした。
岡 朝から晩まで、本当にいつも一緒だったよね。
熊倉 同学年の部員は男子3人女子4人。男子は浪江町以外から通っていましたが、女子4人

は全員浪江で、とにかく仲がいいんです。今でも後輩も含めて6人くらいで旅行に行っています。一昨年は那須、昨年は鬼怒川でした。会うと、専ら近況報告と高校や部活の話になりますね。

◆皆さんの避難の様子やご家族のこと、今の暮らしなどを聞かせてください

岡 私は福島市に避難して、家族と一緒に住んでいます。昨年、仙台の専門学校を卒業し、伊達市内の介護老人保健施設に就職し、リハビリの仕事をしています。今、とても忙しいです。



横山 東沙さん
いわき市在住。気心の知れた友人と旅行をするのが好きです。陸部との旅行では朝練は欠かせません(笑)



▲茨城県水戸市。千波湖畔にて

横山 津島から埼玉、栃木、新潟と、結構点々としましたよ。新潟で就職が決まりました。転職し、今はいわき市に住んでいます。仕事は機械のメンテナンスを行う技術職で、現場での仕事が多いです。家族もいわき市にいます。

熊倉 私も最初は津島から川俣それから仙台でした。就職が決まっていたので、水戸には入社日に合わせて越しました。実家は今、郡山市です。娘が生まれてからは、子育てに忙しい毎日です。

◆まもなく4度目の3・11を迎えますが、あの時のことや、ふるさと浪江に対して、今どんなふうに思っていますか？

横山 あの日のことは、最近は思い出すことが少なくなりました。毎日が忙しく、自分のことで精いっぱいです。

熊倉 年月の経つのは早いなあと、つくづく思います。

横山 浪江には帰れないと思っていますが、思い出はそこで止まっています。友だちが頑張っているから、私も頑張れる。頑張る元気の源みたいなのでしょうか。

熊倉 「住めば都」と言いますが、水戸もいいところですよ。当たり前だった浪江は、一つしかないふるさとです。夫も言ってくれているのですが、いつか私

の故郷を子どもたちにも見せてあげたいと思います。

岡 一緒に遊ぶのは浪江の友だちです。帰れないけれど、故郷をつないでくれているような気がします。

◆最後に、皆さんの目標、夢など、これからに向けたコメントを聞かせてください

岡 早く仕事に慣れたいです。それから、結婚もしたいですね。

横山 私の仕事は、必要な資格が多いので、それらを制覇したいと思います。

熊倉 まずは娘の無事な成長でしようか。私は三人姉妹なので、子どもも3人は欲しいです。それと、なるべく早く仕事に復帰したいです。

岡 私たちはこれからも、おばあちゃんになっても、ずっと仲よくしていきたいです。



神奈川県

井上 コヨさん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間
取材日：2月27日 「平成27年4月 広報なみえ掲載」

今は、ここで楽しく暮らしています

現在、井上さんは、大熊町から避難してきた妹さんと二人で神奈川県の市営アパートで暮らしています。毎日声をかけていただくお友達に恵まれて、穏やかに暮らされている様子でした。



▲右：妹の常盤ツメ子さん「姉は昔から、途中で投げ出さず、自分で頑張る努力家です」

■義兄に感謝

地震から4日後、神奈川に住む義兄が甥と一緒に、ガソリンを工面して悪路の中を迎えに来てくれました。嬉しくて涙が出ました。私たち姉妹と子どもや孫まで総勢10人ほどが、義兄の家に避難し一か月半ほど暮らししました。着のみのままの私たちのために、義兄の知り合いの方々が毎日いろいろな品物を届けてくださいました。実の姉は震災前に既に他界しているのに、義兄はいつまでも縁を切らずにいてくれて、私たちに手

を差し伸べてくれたことに感謝しています。

■人も気候もあたたかい

市営アパートの抽選に当たり、2011年5月1日より私と妹はここで暮らしています。大熊町から避難している妹とは、浪江にいた時にも頻繁に行き来していましたが、まさか一緒に暮らすことになるとは思いませんでした。二人でいるから耐えられてきたと思います。ここに来た時は、家の中でも杖をつけて歩いていたので、いざれ車いす生活になるのかと不安な気持ちでした。妹から「歩かないと歩けなくなる」と言われ、迷惑をかけられない一心で、歩くことにしました。歩いて歩いて、1年半毎日歩きまわりました。散歩に出たことで、友達もできました。今では、杖がどこにあるかわかりません(笑)。

お蔭さまで、散歩や買い物、旅行を楽しんでいます。福島に暮らす娘も毎月顔を見に来られます。大阪に避難した妹に毎年会いに行くのも楽しみです。4年近くここで暮らして、すっ

かりここの生活に慣れました。浪江に帰りたいと思ったこともありますが、信頼できる友達もでき、気候も温暖なこの地を離れがたく思い始めています。

■浪江での思い出

野馬追やお祭り、老人会も楽しかったのですが、「ふきのとう」に通っていたことが一番の思い出です。週に1回、昼12時半まで、人形作り、踊り、かくし芸、とつくり踊り、音楽といろんなことをやりました。15人前後のとても楽しい集まりでした。先日、「ふきのとう」の小林公子先生からお電話をいただき、懐かしくおしゃべりしました。

浪江での思い出を大切に、ここでの暮らしを楽しみたいと思います。



山梨県

森野 俊恵さん・裕子さん(川添)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：3月15日 「平成27年5月 広報なみえ掲載」

いつか浪江に帰れる日を願う

俊恵さんの勤務地となった山梨での暮らしも4年近くなり、今は、孫の祐輝くんの成長が楽しみという森野さん夫婦です。



▲左から 裕子さん、娘の美恵さん、孫の祐輝くん、俊恵さん



▲愛車と一緒に

■大家族での暮らし
震災前、我が家は、私たち夫婦と母、長女夫婦、次女、孫たちと総勢10人の大家族でした。

私も妻も孫たちの面倒をみるのが楽しみでした。孫の友だちが、学校帰りに「ただいま！」と言って遊びに来たり、近所の人「こんにちは」と立ち寄り、新聞を見てお茶を飲んで帰っていくような家でした。私は猟が趣味で、猟友会に入り害獣駆除をしていましたが、猟友会の仲間の飲み会も我が家で、しばしばやりました。

■山梨に来て

震災の時、母は近くの施設にショートステイしていました。母のことも気になりましたが、何より幼い孫たちのことが心配で、妻と娘たちは避難指示を聞いてすぐに、車2台に分乗して、栃木、千葉、いわきと転々と避難しました。その後、5月に日立パワーデバイス南相馬工場から山梨工場に勤務地が変わったので、山梨に来ました。

4年近く山梨で暮らしたことになります。今は、私たち夫婦と次女、孫の祐輝の4人暮らしです。長女夫婦は、いわき市で暮らし、山形の福祉施設に入居していた母は昨年12月に亡くなりました。震災がなかったら、みんなで賑やかに暮らしていたら

れたのにと思うと悔しいですね。山梨に来てしばらくして、こちらの猟友会に入らないかと誘われましたが、住民票を移す必要があり、帰る時のことを考えやめました。

■散歩道が違う

私は、日立パワーデバイスでシニア社員として今も働いています。次女も同じ工場に働いていますので、日中は妻が一人です。山梨に来て、周囲の人たちにとってもよくしてもらいましたが、浪江とは風景が違います。浪江に住んでいた頃は、妻と二人でよく散歩しました。山に行けば、散歩がてら山菜取りもでき、川に行けば、アユ獲りができました。散歩といっても、ただ歩くだけのことになってしまいます。

娘たちは、もう帰らないと言っていますが、私たち夫婦は帰れる時が来たら帰りたいと思っています。ただし、人の世話になるだけではなく、猟の腕を活かし害獣駆除をする等、人の役に立てる年齢のうちにと思っています。今は、帰れる日に思いを馳せて暮らしています。



群馬県

牛来 美佳さん(川添)

取材者：浪江町役場 三瓶・中川

取材日：4月2日 「平成27年5月 広報なみえ掲載」

またあの場所で、 浪江の空の下で、 みんなに会いたい



今年3月に新曲「いつかまた浪江の空を」をリリースし、充実した音楽活動を展開中の牛来さん。前回の「ころ通信」ご登場は3年前のことです。先般、活動を通じて集めた義援金を役場にお持ちくださった際に（p10参照）、いまの想いを伺いました。

牛来さんオフィシャルウェブサイト [Url http://mica-gorai.jimdo.com/](http://mica-gorai.jimdo.com/)

■みんな待っててーと思いつながら
作った最初の曲

詩を書いたり作曲らしいことを始めたのは小学生の頃でした。震災前からライブハウスで歌っていましたが、腰を据えて曲作りに取り組んだのは、震災の翌年に出したファーストアルバムが最初です。お世話になったライブハウスの店長さんから、こういうときだからこそ音楽やらないか、と言われて。震災の3日後に携帯につづった詩に音楽を付けたのが「浪江町で生まれ育った。」です。

その後は様々なイベントにゲストで呼んでいただくことが増え、昨年3月からはワンマンライブも開始しました。合わせてオリジナルグッズの販売も始め、1年間の売上をこのたび町に寄付させていただきました。

震災後、「家に帰れない」ということがわかったとき、こんなことが起こるなんて、もうとにかく悔しくて。その気持ちを伝えるには音楽しかなかった。最初の曲は、「みんな待ってて、いま歌うから！みんなの気持ちを歌うから！」と思いつきました。そのときの悔しさは、今でも変わりません。それに今は「風化」の悔しさが加わっています。よく「帰らないの？」と聞かれるので

すよ。帰れないという状況にあることすら知られていない。ライブでは、浪江の現状をお話するほか、毎日の当たり前の幸せをどうか忘れないでください、という話もしています。

■今の自分にできることを

私のライブを聞いて、今の自分にできることをしようと思った、と言っていただけなのがいちばんうれしいですね。その際、浪江のため、被災地のために何ができるか考えるのも大事ですけど、具体的にはなかなか難しいと思います。だから、「できること」というのは、(被災地の困難な状況を)自分に置き換えて考えるということだと思えます。目の前にある課題から逃げないこと。諦めず、ひとつずつ悩み苦しみを乗り越えていくこと。それも大震災から学べることのひとつではないでしょうか。

今年3月にリリースした「いつかまた浪江の空を」は、文字通り「あの空の下で、またみんなに会いたい」という想いを込めた歌です。海がそのまま反射しているような浪江の空は、とにかくきれいな。生まれ育ったあの空の下で、またみんなに会いたい。そうなんです、浪江町で会いたい。

他所じゃだめなんです。あの場所
でなければ。

■あきらめる理由はない

現実的には、避難指示が解除されてもみんなが戻るのには難しいと思います。私もやはり、小学生の娘のことをまず考えますから、「帰りたいけど帰れない」状態は変わらないでしょう。でも、想像はしますね。将来は浪江に帰って浪江から発信することもできるかなど。これまで築いてきた音楽のネットワークを生かして、たとえば3月11日に浪江と中継をつなげて各地で同時ライブをやるとか。そういう「妄想」はいっぱいありますよ。

あきらめる理由はないって思うんです。難しい現実はあるけど、そこにみんなが存在していた、もう一度その姿を見てみたい、あの場所でもまたみんなに会いたいという想いに、叶うのかどうか？という問いは要らないと思っています。



◀ご来庁いただいた日は、牛来さんの笑顔のような、気持ちのいい晴天でした。



福島県

菅野 信雄さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：4月9日 「平成27年6月 広報なみえ掲載」

健康第一を心がけながら、 家族仲よく暮らしています

菅野さんは南相馬市小高区生まれ。20歳の時から東京で美容師の修業をされ、浪江で就職。同じ美容師の妻、真里子さんと、平成元年から震災前まで美容室『かぐや姫』を経営。さらに平成21年から、釣りの趣味と寿司職人だった10代の頃の経験を活かし、居酒屋『真釣り』も営んでいました。老後、悠々自適に暮らすための準備として、自宅に程近い所に店を開いたとのこと。

現在は、真里子さんと、元気に働く次女の3人で福島市笹谷東部仮設住宅にお住まいです。

■残念なのは、一緒に避難した母の死
5年前、大地震が起きた時は、居酒屋の仕込みが終わり、休憩中の出来事でした。あまりの揺れに立っていられず、ただ茫然と地震が収まるのを待つだけでした。その日の夜は服を着たまま、いつでも外に飛び出せる格好で床に就きましたが、母と私たち夫婦、次女と家族4人眠れないままでした。
翌日、避難命令が出ましたが、年老いた母が一緒というこ



▲菅野信雄さんと真里子さん。「焦っても仕方ないよ」と笑っていらっしゃいました。

しました。
福島市に来た当初は、県が実施するホールボディカウンター測定のアルバイトで、1年半ほど添乗員を務めました。今は妻と二人、この家でのんびりとそれぞれの趣味を楽しんでいます。妻は小物づくりなどの手芸、私はペーパークラフトを習ったりしています。最近、テニスも始めました。週2回ですが、浜通りから避難されているメンバーもいます。
また、母は心労からか体調を

ともあり、遠くまでの移動は無理だと判断して南相馬市小高区の叔母の家に避難しました。3日目、小高区にも避難命令が出て、原町区の「ゆめはつと」に行きました。4日目から宮城県の実兄の家

に3週間世話になった後、東和町の避難所で5日間を過ごし、さらに猪苗代町のヴィラホテルに約3か月滞在しました。7月に今の笹谷東部仮設住宅に入居

崩し、震災の翌年1月、残念ながら浪江に帰ることなく亡くなりました。

■避難もここまで来たら、のんびり構えることに

震災当初は、避難先で店を構え、ゼロから再出発することも考えましたが、私たちの年齢を考えるとあまりにもリスクが大き、今のこの生活を楽しむことにしました。ましてや東京で美容師をしている長女は、今のところ福島には戻らないようなので、今後は福島市の復興公営住宅で暮らすことを考えています。

浪江町にはお彼岸やお盆の墓参り、一時期帰宅などで帰ることがありますが、除染はまだまだ進んでおらず、帰っても生活はできないでしょう。けれども、いつか遠い日に人が住める環境に近づき、あのきれいな海で釣りができたらどんなにいいだろうと思います。



神奈川県

榊井 靖夫さん・良子さん(田尻)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：4月21日 「平成27年6月 広報なみえ掲載」

暮らし方は変わっても、今あるものを大事に

震災前は、富岡と浪江で写真館(株)サンフォートを経営していた榊井さんご夫婦。神奈川県教会関連の住宅に避難し、愛犬と一緒に穏やかな暮らしを送っています。



▲榊井さんご夫婦と愛犬のナナ



▲榊井さんの写真が「アドベンチスト福祉会」機関誌の表紙に

■**現像所と写真館を営んでいました**
震災前は、写真の現像処理やコンピュータ画像処理、卒業アルバム制作をしていました。浪江町と富岡町に店を構え、長女夫婦と2人のスタッフ、私たち夫婦のあわせて6人で働いていました。双葉郡内と

南相馬市の一部の学校、幼稚園などあわせて17校を担当させていただきました。他に、結婚式の婚礼写真撮影などもおりましたので、本当に忙しかったですね。

■津島小学校へ

震災後、すぐに津島小学校に避難し3泊しました。東京電力の仕事もあり、広報などで原子力発電の安全性について、耳にタコができるくらい聞いていましたので、避難所のテレビで、水素爆発の空高く立ち昇る灰色の煙の画像を見ても、何の恐れも感じませんでした。よもや、原子炉のメルトダウンで放射能漏れい事故が起こっていたとは思いませんでした。放射能が流れた方向などの情報開示が遅れたことに、町長が激怒したことは当然のことと思います。

■5回の転居

避難していた津島地区は線量が高く危険ということで、三女の嫁ぎ先の裏磐梯に向かうため、長女家族を乗せて残雪の阿武隈山地を越えました。長女家族5人に私たち2人合計7人と三女家族6人あわせて13人、一挙に大家族となり、2世帯住宅

として建てられた家も狭く感じられるほどでした。親戚とはいえ私たちが快く受け入れてくれたことを今でも感謝しています。三女宅で10日間過ごしました後、川崎市登戸の次女のところに1か月滞在しました。その間、教会関連の知人、友人から「牧師館が空いているから避難してきては？」と奈良や横須賀、つくば：5か所からお誘いがありました。次女宅に近く、周辺環境の良い横浜市の今の場所に落ち着くことになりました。津島を出てからのジプシー生活、通算5回の転居となりました。

■暮らし方は変わっても

日常の暮らし、仕事、地域のコミュニティ等、失ったものはたくさんありますが、新たに得たものも数多くあります。現在の住まいは、周辺に小学校、特別養護老人ホーム、ケアハウスなど教会関連施設が複数あり、都会の喧騒さをほとんど感ずることのない所です。故郷に帰還するのは断念するほかないと思いい、震災後に飼ったスピッツのナナと、2人と1匹の生活を送っています。

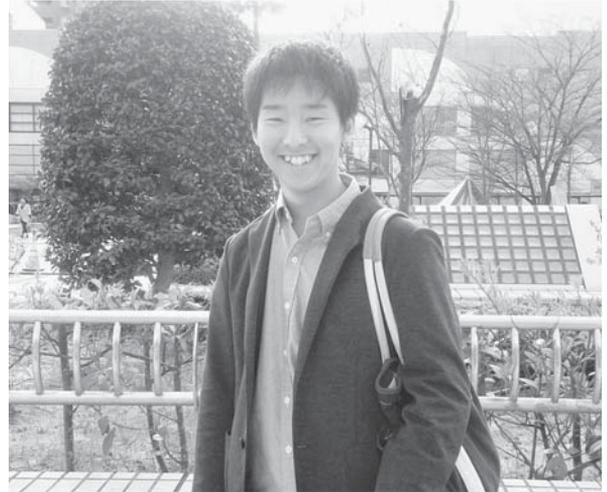


小野田貴行さん(大堀)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：4月18日 「平成27年6月 広報なみえ掲載」

教師を目指して、邁進中！

この春から大学生となり、東北学院大学へ通い始めた小野田さん。美里町から仙台の泉キャンパスまで通学時間は2時間余り。ちょうど大学の講義が午後からという日に、キャンパスの近くでお話を伺いました。



▲人懐っこそうな笑顔が印象的な小野田さん

■野球一直線の10年

東日本大震災があり、その春中学3年になる時に美里町に来て、小牛田中学校に転入しました。自分はそのな風に感じなかったけど、「最初はガチガチだったぞ」ってあとから親に言われました。学校の友達がとでもフレンドリーに接してくれたので助けられました。高校は野球漬けの毎日。夏頃からピッチャーをやって、野手のバッティング練習のあと、走り込みをして足腰を鍛えていましたね。

今は大学のサークルで週1、体を動かしています。自分は教員免許を取りたいので、そんなに忙しくないところで野球もやりました。

いのでサークルに入りました。自分はもちろん楽天ファンです。大学の入学式が終わってから、午後の楽天の試合を母と二人で観に行きました。野球をやっていた身としては、横山投手が活躍している姿は嬉しいです。自分は小学3年から野球を始めたんですけど、少年野球で当時中学生の横山さんが投げてくれたんです。球早くて打てなかったですけど(笑)。その時からズバ抜けていました。

■教えることの楽しさ

大学が始まって朝が早いです。8時50分が1講目なので、5時半に起きて、家を6時半に出で、キャンパスに着くのが8時半頃。家から電車、地下鉄、バスを乗り換えて通っています。はつきりと教員を目指そうと思ったのは中学2年ですね。少年野球の監督をやっていた父親の姿を見ていて、俺も人に何か教えることが好きだったんです。数学が得意なので、それを生かして教員を目指すのもありかなと、そこから思い始めました。人に教えるのが楽しくて、解ってもらえた時の嬉しさがあるんです。

■教師になって、胸張って

高校3年の時、先生に声をかけてもらって「ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2014」に応募しました。250人くらい応募があったよ

うですが、56人の参加者の一人に。自分がついていました。福島、宮城、岩手、被災3県の高校1年〜3年生が対象で、最終的に自分たちが考えた復興企画をプレゼンテーションしたんです。初めは軽い気持ちで行ったんですけど、震災復興についてものすごく考えさせられました。

もし自分が高校か中学の教師になったら、震災の時に小学1年生とか幼稚園児だった子に震災のことを伝えることになる。何があったのか分からなくて、今に至っているだろうと思うんです。しかも地元のこと、浪江のこととか、全然分らない子もいると思うので、自分が教師になったら、教えていくのもありじゃないかと、考えるようになりました。

自分は地元のこととは忘れられないですね。生まれてからずっといたので。「自分は浪江町民だ」って胸張って言っています。

(参考)

- 「ビヨンドトゥモロー」とは、東日本大震災により被災した若者のリーダーシップ教育支援プログラムのこと。
- 小野田さんが参加した『ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2014』の様子は、YouTube(141011-13_BT_リーダーズサミット)の動画で見ることができます。またホームページ(<http://beyond-tomorrow.org/program/past-program/tf152014/>)より、報告書(PDF)をダウンロードできます。

石澤 孝行さん(権現堂)
佐藤 篤さん(権現堂)・田澤 義秀さん(川 添)
伴場 裕史さん(加 倉)・門馬 和彦さん(権現堂)



福島県

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：4月11日 「平成27年6月 広報なみえ掲載」

ふるさとへの思いと人々への祈りを込めて、
川添神楽、新たな出発



▲4月18日に本宮市で行われた「しらさわ桜まつり～復活！桜と花火の競演 請戸川リバーライン桜まつり～」で披露されました。

明治40年頃、修行を積んだ地元の神楽の名人が村人に披露したのが始まりとされ、脈々と受け継がれてきた獅子神楽。正月に悪魔祓いや豊年万作の祈願をしながら舞い歩くこの伝統芸能は、踊り手（前かぶりと、「尻尾持ち」と呼ばれる後かぶりの2名）と、横笛や太鼓などの囃子方で編成され、川添地区の住民の方々が代々務めてきたそうです。

震災以前から神楽を行ってきた40代の男性たちが中心となり、新たに結成されたのが「浪江町川添芸能保存会」です。東日本大震災と原発事故からの避難によって地区の人々が離散してしまった中で、ふるさとの伝統芸能を再び継承することによって、人と人をつなぎ、ふるさとの記憶を風化させない活動が始まりました。今年の元旦に県北地域の仮設住宅数か所でお披露目を行い、4月18日に本宮市で開催される「しらさわ桜まつり」では一般の方々にも披露されました。

◆浪江町川添芸能保存会（以下、会）に参加したきつかけについて、聞かせてください

石澤 震災後、気持ちが落ち込んでしまい、人に会いたくなくなりました。でも偶然に、しかも川添で門馬さんと田澤さんに再会して、声をかけられました。
田澤 避難して、地域の同じ境遇の仲間と集まれるきっかけとか、何か一緒に取り組むことができなかつた、ずっと思っていたんです。
門馬 20代前半から盆踊りとか神楽をやっていました。震災から5年が経って、歳と共に体力



▲笛の担当（豊永和洋さん）がもう一人いらっしゃるそうですが、残念ながらこの日は欠席でした。

が落ち、年月が経つにつれて、今やらなきゃ復活させるのは難しくなると思いました。
伴場 震災前、神楽をすることが楽しくなりました。それが一切無くなってしまい、石澤さんから再開したいという話を聞いた時、仮設住宅を廻って、みんなに喜んでもらえたら嬉しいなと思って参加を決めました。
佐藤 今日が初稽古なんです。震災前、保存会には「来年は入れよ」って言われていました。震災後、再び集まれたので、このつながりを大事に、楽しくやっていきたいと思えます。



▲取材当日、初めての話が飛び出したり、それぞれの思いが語られたり、賑やかなインタビューとなりました。



伴場 裕史さん
福島市在住。



佐藤 篤さん
福島市在住。



田澤 義秀さん
宮城県仙台市在住。



門馬 和彦さん
福島市在住。



石澤 孝行さん
西白河郡西郷村在住。



▲かなりの体力を要する獅子神楽。
「幕舞」「幣束舞」「鈴舞」「乱獅子」の
4種が演じられます。

◆今年の正月、元旦に初披露を
された時の感想や、エピソードを聞かせてください

伴場 集まってくれた人たちの笑顔が印象的でした。浪江の人たちが一か所に集まっているだけで、その空間、空気が心地良かったです。

田澤 獅子神楽のOBの方々が再開を祝ってください、喜んで頂けたことが一番です。川添の方々も本当に喜んでくれました。

門馬 川添に自分分は居たんだな、という感慨がありました。
石澤 初披露に向けて、浪江町の仮設住宅自治会を全部訪ねました。津波の被

害を受けた地域などは、まだ正月気分になれない、気持ちの整理がついていないなど、さまざまなきっかけがありました。獅子神楽を見て子どもたちが笑ったり泣いたり、大人にもいろんな顔がありました。そういうみんなの顔や光景が見たかったということに、改めて気づきました。神楽を通して、気持ちの整理ができていない人も家の外に出て来てくれたり、人と話すきっかけになったりしたらいいと思っています。

◆会の活動を通してどんなことを目指したいか、どんな明日を描いていらっしゃるか、聞かせてください

石澤 本日初参加の佐藤君と20代前半の若者が数名、今年は入会してくれそうです。若者との出会いは少ないですが、次の世代の育成は不可欠です。今、浪江の時計は止まっています。でも巡り会える人とはきつと会えると思っていますし、伝統芸能は失くしてはならぬものと思っています。それから、今まで言っていなかったけれど、前の保存会でやってた川添の盆踊りも復活させたいんです。

佐藤 避難先でも伝統を絶やさないようにしたいです。ふるさとに帰ることができたら、また川添でやりたいです。

伴場 今のメンバーと一緒に活動することが楽しいから、続けたいです。実は子どもが生まれれば父として格好いい姿を見せてやりたいとも思っています。

石澤 会の活動に子どもたちを巻き込みたいと思っています。多感な年頃に避難しているでしよ。「浪江」という名前やふるさとの印象も忘れないように、子どもたちへこの活動を発信したい。そして、浪江が地図から無くならないように、浪江を継ぐ者へ浪江を遺すにはどうしたらいいかを、一緒に考えながら活動したいです。今は小さなつながりですが、この思いを広げていきたいと思っています。

田澤 自分自身、先のことにはよくわかりません。今できることを精一杯やりたいです。60歳くらいになって田畑を耕しながら、川添にみんなが戻って来るのを待ちたいという夢があります。

門馬 先行きは不透明ですが、若者や子どもたちと一緒に、できる限り川添神楽を継承していきたいですね。



福島県

山田 秀男さん(井手)

取材者：浪江町復興支援員茨城県駐在 田中・石田
NPO法人茨城NPOセンター・commons 横田
取材日：4月28日 「平成27年6月 広報なみえ掲載」

住まいを求め、二人で歩いた4年間

山田さんは、原発災害により、福島、埼玉を経て2年数か月前にいわきに避難しました。いわき市にできていた浪江町民の会に参加し、奥さんと二人暮らしています。



▲浪江町の家で藤の花の写真を背にした山田さん

■妻を介助しながらの避難生活
震災前、地元の行政区長を務めていた時、妻が病で倒れました。体の自由が利かなくなりました。妻を介助しながら生活している中で、今回の大震災と原発事故に遭遇しました。多くの町民がつめかけた施設は混雑し、介助が必要な人が入れる状態ではありませんでした。携帯と免許証しか持たずに家を出たため、小銭がなくて電話もかけられませんでした。寒い中、車に妻を残して町を走り回った当時は本当に大変でした。二人で動ける

か、ガソリンがいつ底をつくか、不安を抱えながらもとにかく家族がいる所へ行こうと移動する途中、行く先々で再会した知人に助けられました。その後、家族の住む埼玉に避難しました。体が不自由な人が少しでも住みやすい部屋を見つけるために家族が協力してくれました。それでも、福島県外にいればなかなか福島の情報得られません。一時帰宅するにも近い方がいいと思います、いわき市で住宅を探そうと10回近く埼玉から家さがしに通いました。この時も、入口の段差が少ない家を見つけたのは苦労しました。漸く今の家が見つかり、いわきに来てからは、親戚の協力も得て、妻の通院、介助や家事を行いながら新たな生活を始めました。そして、ある会合に出たことがきっかけで、いわき市に避難されている浪江町民で組織している絆会という自治組織に参加することになり、今は同会が運営する会館の当番をしたりしています。私は、コツコツとモノをつくるのが好きで、浪江町



▲浪江町で大事に育てていた藤の花

の自宅の塀には、丹精込めて育てた藤の花が毎年咲いています。今は、家ではパズルなどをして過ごしています。

■町の人々への想い
いつも、こころ通信が届くのを心待ちにしています。それぞれの方が今どこでどうしているのかを知りたいと思うからです。通信を通じて、離れていても町民の皆さんとつながりたいと思います。



大阪府

福島民話の語り部 吉川 裕子さん(権現堂)

取材者：浪江町復興支援員京都府駐在 富川・土田
取材日：4月30日 「平成27年7月 広報なみえ掲載」

今、頑張れる源は浪江を想う気持ち

平成24年7月の広報なみえに掲載されて以来、約3年ぶりの取材になります。大阪府堺市を拠点に大阪府高齢者大学校でお仕事をしながら、福島の民話や被災体験を伝える語り部の活動を精力的に続けられ、悲しい話を明るく語り、前向きな姿勢で多くの方が浪江町を想う機会をつくっていらっしゃいます。

また、浪江にいた時からの語り部活動も続けており、大阪だけでなく、高知や岡山、静岡などからもお声をかけていただき、話をしています。いつも会津がすりの

また、浪江にいた時からの語り部活動も続けており、大阪だけでなく、高知や岡山、静岡などからもお声をかけていただき、話をしています。いつも会津がすりの

この4年間、ふるさと浪江のことを想いながら、大阪を拠点に過ごしてきました。昨年度より、大阪府高齢者大学校（生徒数2,500名余り64科）のクラスディレクターとして1クラスを受け持ち、お世話をさせていただいています。健康や医療、スポーツ交流会、高天祭や修学旅行などのカリキュラムに合わせ、年齢に関係なく必死に学ぼうとされる方々とともに充実した毎日を過ごしています。



▲会津がすりのモンベ姿で語り部の活動を行う吉川さん



▲語り部を聞いた子どもたちから寄せられた感想文

あの日以来、料理やデザートなどでも好きなものは、先に食べ、やらなければならぬことはすぐにやることにしています。突然、会いたかった人に会えない、やりたかったことができなくなつたことは本当に辛いです。それを思うたびに、まさに「今」を大切に生きることが大切なんだと思うようになりました。語り部の活動

浪江の自宅へは、いつも誰かを案内して回るのでなかなか帰宅できない状況ですが、このように多くの人たちとの関わりの中で、忙しい日々を過ごしています。

語り部を聞いた子どもたちが書いてくれたたくさん感想文は、私の宝物です。夜、なかなか寝付けない時などは、その感想文を読み返しながら、元気をもらっています。

モンベをはいて『歯形の栗』などの浪江の民話や被災体験を浪江の言葉で、どんな悲しく辛い話も明るく伝えるようにしています。皆さんは、泣いたり笑ったり真剣に聞いてくださいます。

悲しく生きるか、周りの人たちと交わって生きるかは自分次第、お天道様が上がつてこない日はないので、楽しく有意義に生きていたいと思っています。

おかげさまで、大阪に来ていろんな体験をさせていただきました。たくさんの人たちに出会いました。言葉や食事も違うし、初めは浪江に帰りたい、浪江での近所の方たちに会いたい、いつも思っていました。ここまで時間が経つてしまうと震災前の浪江での人とのつながりも少しずつ薄れていくようで、とても寂しいです。今のところ、大阪でお世話になっていくからには、こちらの人たちに添えるようにしていきたいです。

東京に住んでいた長男は、私たちがお世話になつて大阪に恩返ししたいと大阪で消防士になりました。夫も消防士でしたので、嬉しい反面、今後どこで暮らしていくか、浪江に戻りたいという思いはありますが、とても難しい問題です。現在、4人の子とも5人の孫がみんなで集まる実家がなくなり、子どもや孫にとつても帰れるふるさとなないことは本当に寂しいことです。

でも必ずそれを伝えるようにしています。

近藤 京子さん(大堀)

宇佐美 勉さん(西台)

豊口 澄子さん(幾世橋)・若松世津子さん(権現堂)



福島県

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：6月16日 「平成27年8月 広報なみえ掲載」

「京月窯」はいつまでも人をつなぐ“場”でありたい

今回の取材場所「京月窯」は、大堀焼の窯主、近藤京子さんのご自宅でもあります。

2011年暮れ、避難していた福島市の郊外で「京月窯」を再興されました。その窯の火入れの日に夫の近藤公孝さんに取材させて頂き、ご一家の避難の様子などもお聞きした記事は、『浪江のころ通信 第7号(広報なみえ平成24年1月号)』に掲載されました。

その際、公孝さんは「窯元の場でもあるけれども、大堀にいた時と同じように、みなさんの憩いの場にしたい」とおっしゃっていました。妻であり、窯主の京子さんもまた、相双ビューローの取材に対し同じことをおっしゃっており、その所縁の場所で、浪江の方々のお話を聞くことができました。



近藤 京子さん



宇佐美 勉さん



豊口 澄子さん



若松世津子さん

◆まず、みなさんの東日本大震災・原発事故からの避難の様子と、この京月窯やご出席の方々のつながりなどをお聞かせください

宇佐美

ペットを連れ家族4人で津島の活性化センターから土湯温泉、川俣町の道の駅での車中泊や町内の体育館を経て、名古屋に避難しました。高齢だった両親との車中泊や体育館での日々は辛かったですね。その後、二次避難で猪苗代へ、そして福島市宮代の仮設住宅から現在の住まいです。今、京月窯から目と鼻の先に自宅を建てており、娘と一緒にまもなく引っ越します。

若松

津島から友人を頼って福島市へ、そして東京に避難しました。猪苗代に二次避難した後、福島市内の借上げ住宅に住んでいます。避難した当初は夫の父、私の両親とも一緒でしたが、今は別々に暮らしています。市内に造っている自宅には、私の父も一緒に住むことになっています。

私と京子さんは同い年であり、お勤めを始めた独身の頃から長い付き合いです。また、豊口さんは私の娘の恩師であ

り、本当に久しぶりにお会いしました。

豊口

夫と福島市笹谷東部の仮設住宅に住んでいます。娘たちは会津若松市に避難していましたが、今は福島市におります。今、これからの住まいのことを考えている最中です。

昨年の冬頃でしたが、この近くに住んでいる友人に連れられて京月窯を訪れたのがきっかけです。でも、京子さんの作品は浪江にいた頃から知っていて、家族みんなが京月窯のファンです。特に次女は、京子さんの作るランブシエードがお気に入りです。

近藤

「やすらぎ荘」から津島を経て、二本松市針道の避難所から一時は東京の親戚へと、私の両親ら家族全員で転々とした。

高齢の両親に浪江に居た時と同じような環境で暮らして欲しいという願いと、窯主という仕事を早く再開したいという思いとで、この古民家に居を構え、窯を開くことを決めました。男性の窯主さんとは違った女性ならではの作品づくりを、やれるところまでやってみたいという気持ちもありました。

ここは私の仕事場ですが、避



▲みなさんのお話しはいつまでも尽きませんでした。
ここには、いつもこんな風に穏やかな時間が流れているのでしょう。

難されている方々が気軽にお茶を飲みに来られる場所でありたいと思いますし、殊に仮設住宅に暮らす方々はお家が狭いからです、気晴らしになればと願っています。

◆みなさんにとって「京月窯」はどのようなところですか。また日頃どんなことをして楽しんでいますか

若松 私は長い間JAに勤めていましたが、震災後は働き過ぎて疲れてしまったようで、今年3月で早期退職をしました。ですから、京月窯ができた頃は夜に遊びに来ていました。

今は、東京で仕事をする娘に会ったり大好きなサッカーチームである浦和レッズの応援に行ったり、週に1回習うフラダンスを楽しんでいます。実はダイエツトのためにフラを始めたのですが、その奥深さや身体の使い方にはハマっています。

宇佐美 近所に土地を求めると「京月窯」が近くにあることを知りませんでした。また、知り合いが数軒あることも分かりましたので、見知らぬ土地ですが何とか慣れ親しんでいきたいと思っています。

私の趣味は音楽鑑賞と鉄道模型づくり、カメラなどです。鉄道模型は暫くお預けですが、今度の家には浪江の家と同じようにオーディオルームを造りました。

近藤 高齢の両親と夫がいますから、家族の暮らしが一番大切です。仕事をしていても、訪ねてくださる方があれば一緒にお茶を飲んだり、お話しをしたりします。

また、ここで開く夜の陶芸教室には、近隣の方々が2つのグループを作って月1回来られます。福島と郡山のカルチャースクールでも教えています。(福島は月2回、郡山は月1回)

◆浪江に対する思いや、みなさんにとってふるさととはどんなものなのかをお聞かせください

豊口 「ふるさととは遠きにありて思うもの」と言いますが、まさに、いつも心の中にあります。

近藤 ふるさとの浪江を忘れることはありません。心の宝として大切に思いながら、これからは今の暮らしを大事にしたいです。

若松 ふるさと浪江は思い出です。今こうして福島市に住んでいることは夢をみているようですが、災害から5年過ぎても浪江には安心して住めないと思うので、もう戻れないと思っています。

浪江のグルメもよく思い出します。高野菓子舗のパンや「鮎鱈のとも和え」、「かすべの煮付け」など今となっては思い出になっしまいました。

豊口 そうそう、私も。「ほつき貝の刺身」や「鰹のアラ汁」。浪江でしか食べられない美味しいものを思い出しますね。

宇佐美 浪江に未練はありますが、原発の状況を見る限り帰れないでしょう。年齢を考えると、これからの生活をどうするか決めるのは今だと思っと思っていますし、もういい加減、落ち着きたいのです。

それにしても、浪江での気心が知れた隣近所の人たちに囲まれた暮らしが懐かしいですね。こうなってみると心の交流を持っていることが一番です。それと笑い。微笑むのではなく、大きな声で笑うことを忘れないようにしたいですね。



神奈川県

荒川政幸さん・淳子さん・アキエさん(請戸)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：6月24日 「平成27年8月 広報なみえ掲載」

やれることをやりたい、やらなくては

いわき市で雑貨店を経営していた荒川さんご夫婦。
今年4月に、神奈川県秦野市で雑貨店「GREEN GRAIN」
をオープン、新たな一歩を踏み出しました。

■政幸さんの話

震災当時、私たちは、いわき市で雑貨店を経営、請戸の家から毎日通っていました。震災はオープンして1年半ほど経ち、顧客も増えてきた頃でした。地震や津波が起きた時に、私たち夫婦はいわき市の店舗にいました。母はバス旅行。父だけが自宅にいました。父はすぐに車で避難、機転をきかせ混雑する道路の反対車線を走り、難を逃れることができました。私たち夫婦も自宅に帰ろうと午後4時にいわき市の店を出たのですが、渋滞のため、浪江町高瀬の「いこいの村」で父たちと合流できた時には午後11時を過ぎていました。翌朝、津島に緊急避難。更に東京都大田区の妹の家へと避難しました。その後、私たちは妻の実家のある神奈川県秦野市のア

パート、父母は福島市の仮設住宅でそれぞれの二重生活が始まりました。震災から4年。どこでの暮らしを選ぶか迷う日々でしたが、アパート近くに店舗にできる売り物件を見つけ、今年4月に、雑貨店「GREEN GRAIN」をオープンしました。大正13年にできた建物ですが、リフォームし家周りを整え、店舗兼住宅にしました。妻の作るステンドグラスの小物とあわせ雑貨品を仕入れて販売、お陰さまでお客さまも増えてきています。

請戸の家には、夫婦のこだわりがいっぱい詰まっていました。津波で、築9年の家は床板を残すだけで跡形もありませんでした。一昨年初、父はガンで亡くなりました。母は、福島の仮設住宅で一人暮らしをしていたのですが、昨年夏、脳こうそくで倒れ入院、車いすでの生活。今は車で10分ほどの秦野市の介護老人保健施設に居しています。「震災がなかったら」という思いにはなりますが、「やれることをやりたい、やらなくては」と気持ちを切り替えるようにしています。

■アキエさんの話
私は、給食のおばさんをやっていたので、食事作りが得意。仮設住宅に入居していた時には、おかずをたくさん作って、近所の人に配ったりしていました。仮設住宅では、震災前と同じように、お

しゃべりを楽しめました。ここ（介護老人保健施設）の入居者は全国あちこちから集まっているので、ふるさとの話ができません。食事に、外国産の名前もわからない魚が出てくると、請戸の魚の美味しさが思い出されます。フラワーアレンジメント作りや「お出かけ」もありますが、一番の楽しみは、民謡歌手大泉逸郎の歌を聴くこと。浪江のことが思い出され涙が出てしまいます。

■淳子さんの話

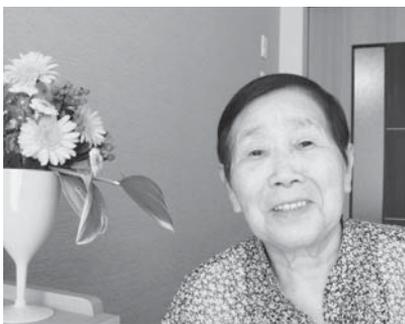
浪江に戻るたび、参加していたラベンダークラブで植えた6号線沿いのラベンダーを見ると、手入れをしたくなります。また、保健協力委員をさせていただいたお陰で、いろいろな人に出会い、お世話になりました。浪江には9年間しか暮らせませんでした。楽しい思い出がたくさんあります。自宅付近から見つけ出した食器のかけらを現在の家の駐車場で利用、時々眺めています。



▲荒川政幸さん、淳子さんご夫婦



▲雑貨店「GREEN GRAIN」



▲アキエさんが活かしたフラワーアレンジメントといっしょに



島根県



阿部 秀男さん(川添)

取材者：NPO法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：7月6日 「平成27年9月 広報なみえ掲載」

福島に帰ることにしたよ。だって、故郷だからさ

震災の日には島根でお仕事をされていた阿部さん。「驚いて、とにかく行ける所まででいいから、行きたかった」

あの日から4年が過ぎた今、「そろそろ、落ち着きたいと思って」ここ島根から郡山市に引越しを決意されました。



▲大好きな宍道湖の見えるお店で

▼枕木山の頂上から見た風景（「なみえ新聞」への投稿より）



■島根での暮らし
最初に来たのは30年くらい前。仕事の関係でね。ここと福島、そして全国の現場を行ったり来たりしてたけど、2012年の12月に仕事を辞めて、島根でアパート暮らしを始めた。あちこちを転々としていたので、とりあえず住むなら島根がいいと思ったから。以前の仕事仲間にか電製品は揃えてもらい、行ったらすぐ住めるようにしてもらった。

■あの日からのこと
3月11日の5時くらいかな。事務所に上がったら、「東北で大きな地震」と聞いて、とにかく帰ろうと思ってる調べたんだけども、とても帰れる状況じゃなかった。一晩中、気が気じゃなくて、ようやく姉と連絡が取れて、その大変さを聞いた。翌年、グチャグチャになった浪江の家の中を初めて見て、「何だこりゃ!」と思った。道路や街並みもひどくて、もうこの町はダメだな、と…。その後、2か月に1回くらい浪江に戻ってるけど、徐々に徐々に復旧してるのを見て、「本気で

ね。でも、それはどこに住んでもそうだと思う。
宍道湖の夕焼けの風景が好き。近辺の風景写真を撮って、「なみえ新聞」に投稿してるよ。恥ずかしいからペンネームで。
今は週に3〜4回、10kmくらいは走ってるよ。仕事辞めて時間はあるし、周りを見たら走ってる人が沢山いたので、じゃ、自分もやってみようと思って。最初の頃は500mでだめだったけど、だんだん慣れてきた。

■これからのこと
若い時からずっと、仕事で日本中を転々としていたから、福島に戻っても昔の知り合いは：：：どうかな。
戻ったら、まずは、新しい道をたくさん覚えようと思ってる。郡山でも走るよ。いい場所があったんだ。ポケっとしてられないよ。

やってくれている。もしかして、帰れるようになるかも？」と思った。
■故郷への思い
震災から4年近くが過ぎて、去年の暮れかな、そろそろ落ち着こうと思って土地を買った。郡山市にしたのは、なんとなくって気持ちだけど、大前提は福島県内。
だって、故郷だからさ。
ゆくゆく浪江に帰れる日が来たら、郡山に買った土地を売って、戻るかもしれない。戻ったとしても、両隣には誰も住んでいないかもしれないけど。本当にそんな日が来るのか、今は、想像がつかないけど、やっぱり、帰りたい思いはあるんだよ。



安倍 久子さん(棚塩)

取材者：浪江町復興支援員京都府駐在 富川・土田
一般社団法人関西浜通り交流会 山内
取材日：7月19日 「平成27年9月 広報なみえ掲載」

生け花によって救われた私の命

震災前は、浪江町の幾世橋長寿学級の学級長さんをされていた安倍さん。富山市に避難後、数々の苦難に遭いながらも家族とともに乗り越えられ、現在は、好きな華道を通して支えてくださる方々と共に充実した日々を送っていらっしゃいます。



▲いけばな展に出展した久子さんの作品

■避難先を求めて…たどり着いたのが富山市
夫と息子とともに避難所を探しましたが、どこも満員でたどり着いたのが、富山市でした。富山市の街は明るく、ガソリンスタンドやコンビニも開いており、物資もたくさんあって別世界に見えました。当時、放射能の風評被害がひどかった時にも富山の皆さんはとても温かく接してくれ、ホテルにも宿泊させてもらい、市役所で紹介されたマンシヨンの社長さんは笑顔で受け入れてくださいました。その後、別々に避難していた娘も今のマンシヨンと一緒に住むことになり、震災で傷ついた心と体を癒していました。そんな矢先に娘が病で倒れたり、義母が亡くなったり、夫が入院したりなどいろいろなお知らせがありました。幸い娘も夫も大事には至らなかつたものの、私自身も一気に体重が減り、心身ともにとても辛い生活で、何事にも意欲がなくなり、寝込む日々でした。

■華道が、人とのつながりを、私に生きる元気をくれました
そんな時、富山市で花展がありました。家族に支えられ、やっとの思いで会場にたどり着き、数々の作品の中いわき支部で学んだ龍生派の作品がありました。それを見た時に懐かしさで涙があふれました。震災があっても変わらないものがそこにありました。会場を後にするときに、娘の肩に寄り添いながらではなく、私一人でシヤンとして歩いていることに気づき、私も家族もびっくりしました。福島の方懐かしいいわき支部の思い出と生け花が私に力をくれたのだと思います。
何度か花展を見に行くうちに龍生派富山支部の支部長さんと会うようになりました。支部長さんは明るく朗らかな方で華道に熱い情熱を持っておられ、「安倍さん、生け花を続けなさい。お花のはさみは、絶対に置かないように。そして頑張ってくださいませ」と熱心に声をかけてくださり、龍生派本部からも花器などの支援もあり、私は永年取り組んでいた華道を再開する機会をいただいたのです。

そして、支部長さんや支部の皆さんとともに花を生け、交流する中で富山の良いところをたくさん知ることができました。また、福島の良いところもたくさん話をしたり、悩みを聞いてもらったりと、富山でもたくさんのお友達ができました。体調も良くなり、先日、いけばな展に出展することができました。
■小さな一歩でも、諦めないで前に進むこと
震災前は、幾世橋長寿学級や女性友の会、陶芸教室、絵画教室、華道教室などを通して、たくさんの方とのつながりがあり、忙しいながらも充実した日々を送っていました。長寿学級では、まだ2年目の私を学級長に選んでいただき、皆さんには大変お世話になりました。ただ、あの日に会うことができなくなり、その後の皆さんのことがとても気がかりです。この機会に皆さんがそれぞれの地域でお元気に過ごされていることを願っています。また、富山市内での四季折々に咲く花や景色を見るにつけ、遠く離れた浪江のことを懐かしく思い出し、ふと寂しくなる時がありますが、こうして自分が今、辛かった日々を乗り越えて、好きなお花を続けられることに感謝をしています。
辛いこと、悲しいこと、思い通りにならないことは誰にでもあると思います。でもどんなに小さな一歩でも諦めることなく、頑張る前に進むことの大切さをメッセージとしてお伝えしたいと思っています。

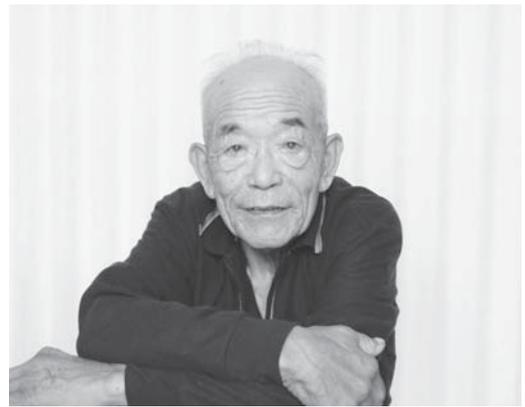


遠藤 春男さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月14日 「平成27年9月 広報なみえ掲載」

孫と一緒にいられることが、 今の一番の幸せです

震災前は、妻と次男夫婦と孫3人、7人で一緒に暮らしていましたが、現在は遠藤さんご夫婦と次男ご家族は別々です。しかし、車で10分程度離れた同じ本宮市内に住み、遠藤さんは互いの家を行ったり来たりしながら、お孫さんたちと一緒に時間をとても大切にしておられます。



▲「まだ笑えないなあ」と呟きながら。本当ですね。

■大地震を2度経験したことになります
3月11日のあの日は、妻も次男夫婦も働きに出ていて、私と孫2人だけが家にいました。もの凄く揺れに、孫を抱えて車に逃げ込み、安全と思われるところまで移動しました。屋根の瓦はひっきりなしに飛んでくるし、犬は吠え続けるし、とにかく凄かったです。何よりも家族の誰にも連絡が取れないことが心配でなりませんでした。少し落ち着いてからは、隣近所のガス栓を閉めて回りました。その日の夜は電気もガスも通じなかったので、発電機で電気を起こし、水は沢へ汲みに行

きました。
翌朝、猪の罾を確かめに行こうとした矢先、突然避難することになりましたが、どうせ夕方には帰れるだろうとボロボボンに長靴を履いて小高、原ノ町へと行きました。その後、新潟市の長男の家に避難し、約2か月世話になりました。その後、北塩原村のペンション、そして今の恵向仮設住宅に落ち着きました。
新潟の長男夫婦と孫の4人家族は、中越地震の時に浪江に2週間ほど避難していました。そんなことがあっていいのかと思っていましたよ。

■今はやることがないんです
私は大型自動車の運転手やトネル堀りなどの仕事をして、やっと悠々自適になったかと思ったら、この避難です。浪江にいた頃は、川に釣りに行ったり、茸を採ったり、鉄砲撃ちもしていたけれど、そんなことをして遊ぶこともできません。近所に住む2番目の孫が釣り好きで、今度、夏井川渓谷に行こうと思っっていますが、ここから1時間もかかるんですよ。若い頃と違って遠く感じます。
避難したばかりの時には2、3か月で戻れると思ったのに、もう5年です。震災前に外壁などを修理したばかりで家はしっかりしているのに、帰ることができないのは悔しいですよ。だけれど病院や店のない浪江には帰れないでしょう。
次男家族は新潟市から長岡市へ避難した後、一昨年福島に戻り、本宮市に自宅を建てました。今はもう3人の孫たちと一緒にいることが最高の幸せです。



中里より子さん(井手)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：7月9日 「平成27年9月 広報なみえ掲載」

仕事は生きがい。 お客様から元気をもらっています！

震災前は、サンプラザ前の黄色い店舗「ビューティサロン中里」を経営していた中里さん。

先の4月1日に郡山市大槻町に「ヘア&メイク中里」をオープンされました。郡山に住む娘さんも美容院を手伝って、新たな一歩を踏み出しました。



▲開店したお店の前で（郡山市大槻町）

■4月1日に新店舗をオープン
震災後は、津島・川俣と避難して、そして福島市で3年間過ごしました。その後、新たな暮らしの拠点を探して、2014年12月29日に郡山市に引っ越しすることができました。住んでからまだ半年。近所の方とはまだまだなじめておらず、どうお付き合いしていくか模索中です。お店も開店したばかり。近隣は静かな住宅街なので近くからのお客様は少ないですが、少しずつ知っていただけたらと思います。

■福島市・二本松市の仮設の店舗でも営業継続中
郡山に店舗を開いたとは言っ

ても、福島市と二本松市の仮設の店舗でも、もちろん営業を続けていきます。これら3店舗での営業日はまちまちなので、予約をしていたらお越しいただく方が多いですね。仮設住宅が終わるまでは仮設の店舗での営業を続けたいと思っています。お客様は浪江町にお住まいだった方が多く、遠くは那須塩原やいわき、相馬からわざわざ来店してくださる方も。本当につくづくお客様には感謝感謝の気持ちでいっぱいです。

■順調だった浪江でのお店

浪江でお店を構えてから27年経ちますが、新築店舗に移転して8年目で震災にあいました。子どもから中高年の方まで様々な年齢の方が来店していただき、親しく和気あいあいと営業させていただきました。振り返れば、お客様に恵まれていたな、と思います。震災時は、まだ美容院の建築費の借金も残っていた再建するのが大変でした。

でも、浪江の美容組合員として仮設店舗で営業できるようになってきたから、自分の元気の源は仕事だな、とつくづく感じました。仕事がなかったら病気に

■落ち着いた日々を願って

以前は、浪江で親しくさせていただいた仲間や知人と、利尻島や黒部、安達太良、栗駒などの山に登りに出かけたり、沖縄や北海道などへ旅行したものです。私は歩くのが好きで、休みの日はよく外出していました。でも、今は仕事で忙しく、親族の介護などもありますからまとまって休みを取ることが難しい状況です。この郡山の店舗兼自宅を準備するのにも2年ほどかかりバタバタ過ごしてしまいました。今後、状況が落ち着いて休みが取れるようになってからまた出かけたな、と思っています。

浪江は生まれ育った大切なふるさとではありますが、この郡山が私たちにとって第二のふるさとになることと思います。みなさんとのコミュニケーションを大切にして郡山でがんばっていきましょう。



天野 静枝さん(北幾世橋)

取材者：浪江町復興支援員アドバイザー 佐藤
NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：8月4日 「平成27年10月 広報なみえ掲載」

5年後また笑顔で会いましょう！

(平成10年度浪江中同窓会幹事 天野静枝・坂本裕美より)

震災後山形県山形市に暮らし、県外の町民の皆さんをサポートする浪江町復興支援員として2年間活動した天野さん。その後、ご家族の都合により山梨県で暮らしましたが、今年3月に山形市に戻られました。そこで今回は、7月25日(土)に郡山市で行われた浪江中学校同窓会のお話もお聞きしました。



▲担任だった山田先生と天野さんご一緒に

■子育て環境を考え山形へ
今回山形に戻ることを決めた一番の理由は、子育ての環境です。1年半山梨県に住んでいましたが、震災後2年山形に住み、今後の子育てを考えると福島に近い山形のほうが良いと思いました。子どものことが一番です。2人の子どもは小学1年生、幼稚園になり、やんちゃですが元気に通ってくれています。震災直後から活動している団体のイベントに先日も参加して川遊びしたり流しそめんだり。子どもの「次はどこに引っ越すの？」という何気ない一言で、もう大人の都合で振



▼乾杯は相川さん！



■かわらない同級生の皆に会い安心しました
地元には時は週1で会っていた友だちと会えなくなり、電話で声を聞いて会えない寂しさの気持ちを埋めています。そんなSNSで「このまま皆と会えないのかな。同窓会って形で皆に声掛けてみよう！」と話が出て、坂本裕美さんと私が幹事で開催することになりました。
当日は87名も集まり、先生方も3名参加してくれました。震災でばらばらになったのからこそ、皆集まりたかったのかも

で過ごすことができます。
り回すのは…と思ひ、夫の両親とも話し合い、山形に戻ってきました。山形ではなまりなど気をつかわない



れません。ただ浪江町でやるのとは違い集めるのは大変でした。はがきも送ったのですが、結構住所不明で返送されてきて…。それでも、SNSのおかげでだいぶつながりました。
残念ながら子どもが小さく行けなかったり、仕事の都合で遠くにいたりして参加できなかった人もいました。皆が集まるのは成人式以来で、久しぶりすぎて話せるかなという人が多かったみたいですが、実際会ったらそんな事は関係なく先生を囲んで楽しい時間でした。どれくらい皆老けているか楽しみだったのですが意外に誰も老けてなかったです！浪江中の校歌を歌えたこともとても嬉しかったです。この年だから落ち着いていて、でもかわらない皆に安心しました。
二次会も60名近く、三次会まで盛り上がり、それくらい「来てよかった！」と言ってくれた人が多く、集まって本当に良かったと思つています。それぞれ状況が変わりましたが、自分たちなりの浪江のつながりの形をこれからもずっと大切にしていきたいです。やっぱり地元の方は最高です！次は10年後の男性の厄流しで集まる予定ですが、それじゃ遅すぎるから5年後にまた集まろうという話になっています。また笑顔で会えるのを楽しみにしています！



青田 宗夫さん・イク子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：8月5日 「平成27年10月 広報なみえ掲載」

帰れる時が来たら帰りたい

青田さんご夫妻が5か所目の避難先として二本松市の安達仮設住宅で暮らし始めて4年。震災時にクリーニングのため預かっていた品物を、2年かけてお客様それぞれの避難先に送ってきたという職人魂を持ち続けている青田さん。

今できる仕事と趣味を楽しみながら、浪江で青田クリーニング店を再開したいという気持ちを持ち続けています。



▲3年前に金婚式を迎えられた青田さんご夫妻

■宗夫さん
高校卒業後にクリーニング店の見習いを始め、その後店を譲られて自分で始めました。震災の日は、請戸地区への配達が午前中で終わる家には一人でいました。町の放送で津波が来ていると聞き、品物を濡らしてはいけないと思い、車に積んで矢沢町の工場に移動しました。その後、家族とは無事に再会して避難しましたが、その時々で大変な思いもしました。毎日のこと

を忘れないようにと震災以来1行日記をずっと続けています。安達仮設で暮らすようになってから、ただ居るわけにはいかないうちからと思っただけの仕事をしてきました。ホールボディーカウンターで東海村へのバスの添乗員、仮設へのチラシ配り、夜回り、一時立ち入りのバスの添乗員、放流している鮎の大きさなどを測ったり、町の防犯見守り隊。自分でも楽しんでるゲートボールとグラウンドゴルフの審判やパークゴルフの指導員の資格も取りました。体を動かすことが大事だと思っ、週に5回ほどやっています。

■イク子さん
震災の時は、原町の病院へ行っていました。津波で道が壊れていて、無我夢中で別な道を探して帰ってきました。その夜飲む薬もなく調子を崩したりもしました。4年が過ぎて、今は仮設の中に友だちも沢山できて寂しくなくなりました。パッチワークやペーパークラフト、折り紙など物づくりを楽しんで、作ったものを友だちと交換しています。毎日何かしらイベントがあつて、参加して楽しんでいます。浪江では、夜ご飯のあとに散歩していましたが、ここでも夕方に40分歩いていきます。歩くの大好きなんです。浪江で暮らすときには、食事作りが心配なので食料品店ができてもらうと助かると思います。



神奈川県

松本 哲夫さん・トシエさん(大堀)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月21日 「平成27年10月 広報なみえ掲載」

かなかな蝉の声にふるさと浪江を思う



▲蔵書に囲まれて暮らす松本哲夫さん、トシエさんご夫婦



教員だった哲夫さんの退職を機に、浪江町に居を構え30年。

終戦後の大連（旧関東州）からの引揚げ、東日本大震災による避難という大きな困難を乗り越え、支え合って暮らすお二人です。

■哲夫さん

私は、生まれてすぐに父と死別。母とも生別し、4歳で祖父母に連れられ大連に渡りました。20歳で敗戦動乱の大連より引揚げ、一時期、浪江の大堀小学校で代用教員として働きました。その後、北海道で教職に就き定年まで道内に住み、昭和60年、定年を機に浪江に家建て、移住しました。すぐ近くには高瀬川、里山の自然に恵まれた暮らしは、充実していました。

震災をしのぎましょう」と隣の高橋さんが声をかけてくれました。私たちが夫婦は車を持っていませんでした。翌早朝、高橋さんの車に同乗し津島に避難しました。津島小学校は、体育館も教室も人であふれていました。体育館のステージ下に1メートル四方のスペースを見つけ座りましたが、早目に着いた人たちには配られたという毛布ももらえず、着の身着のまま避難した私たち夫婦は寒さに震えるばかりでした。津島には三晩いた後、3月15日に「原発事故で危険」と、町役場が用意したバスで二本松に向かいました。

一週間後、息子と電話がつながり、平塚市（神奈川県）に住む次男が、福島空港から伊丹空港までの飛行機チケットを用意してくれました。二本松の駅前から福島空港まではタクシーで、伊丹空港に迎えに来てくれた息子や孫の顔を見た時には、心底ほっとしました。その後、半年間は次男の家で、孫たちと一緒に暮らししました。日当たりの良い、居心地の良い部屋を提供してくれました。ありがたかったです。しかしいつまでも、息子たちの世話になるのもどうかと思い、平塚市内で借家をさがし、3年半暮らしました。不便さが募り、今住んでいる戸建ての家に、一年ほど前に引っ越して来ました。平塚で、かなかな蝉の

声を聞くと、ふるさと浪江の風景が浮かびます。蝉の声は同じなのに、暮らしの変わりようは、筆舌につくせません。浪江に帰ることは叶いませんが、思いは浪江にあります。

■トシエさん

手紙のやり取りを継続していた旧大連の女学校時代の友だちの一人に、浪江の自宅から、着の身着のまま避難し平塚で暮らしていることを知らせたら、同窓生等から次々と生活用品や食品が送られてきました。座布団、食器類、割烹着、食べきれないほどの餃子……。一緒に暮らしていた孫からは「おばあちゃんには、お友だちがたくさんいるんだね」と言われました。友からの「贈り物」は大きな励みになりました。

ふるさとよ
避難漂泊四歳半ひぐらし啼いて
流浪望郷の思ひしきり
みちのく遠いふるさとに
かなかな蝉のなくころか
ここ湘南の丘の上
夜明けの森の葉がぐれに
ひぐらし蝉のなく朝は
あのふるさとと里恋し

（哲夫さんの詩）



よしこ 田尻仁一郎さん・斌子さん(小野田)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：9月3日 「平成27年10月 広報なみえ掲載」

今の生活を楽しむのも大事 今後のことは状況見て判断します

浪江だったら田んぼや畑をやっていた、という田尻ご夫妻。避難している今だからできることを楽しみたいと、毎日忙しく活動しています。充実した日々を送りつつも、みんな一緒に帰って元気で仲良く生活したい、元の生活に戻りたい、そんな願いを持つての避難生活です。



▲元気でいなぎやね、と笑顔の田尻ご夫妻

■仁一郎さん
地震が起きた時は、グラウンドゴルフの練習が終わって道具を片付けてたんだ。妻は、離れている子どもに送る野菜の収穫をしているので、息子は仕事で出かけてたけどみんな無事。停電してたから、夜は避難してきた親戚含めて十数人で毛布にくるまり寒さをしのいで、ろうそくの明かりで過ごしたんだ。ガスは使えなかったからみんなラーメン食べてね。次の日、パトカーからの放送聞いて、車3台で避難したんだ。犬も荷台に載せてね。津島はもういっぱい、10日間川俣高校、そこから妹の住む埼玉で40日間、そのあと日立市



▲日本舞踊若扇流を披露

以来ずっとここにいます。浪江じゃあ、米を売ったり、珍しい野菜なんかも作って食べたりして。子どもたちには送ってたし、友だちにあげてみんなに喜ばれたりしてたなあ。ここに来て野菜買うようになって高くてびっくりした。今はプラントで、きゅうり、トマト、なす、ピーマン、にら、白菜って工夫しながら作ってた。やめつかかなと思っても、毎年どんどん増えてんだ。やっぱり季節の物を朝見るのが楽しみな。それから、平日はゲートボールとグラウンドゴルフをやったんだ。大会でチームが優勝して新聞にも載ったよ。安達では地元の人に良くしてもらって有難いし、浪江の人と会うのが一番楽しいな。
仮設では、20年前から続けている日本舞踊を教えて、芸能大会や、夏祭りや秋祭りとかいするんないイベントに呼ばれて発表してるの張り合ってる。いいな。人間見られないと進歩しないから、見られることが大事。夜まで復習するから悩み事考え

の次男の家で3人と1匹、4か月近く世話になった。子どもにずっと世話になるわけにもいかないから安達仮設に住むことにして、お盆過ぎに引っ越して

■斌子さん
仮設では、料理教室やいきいき体操、社協のウォーキングなどいろいろないイベントに参加するようにしています。建設組合の方など全国各地からの支援イベントもとても楽しみです。本宮の体操教室には毎週通っています。それから、浪江にいる時にはやってなかった日本舞踊を習って、みんなと一緒にアトラクションに出ています。一生懸命に習うことは楽しいし、覚えたいのを発表するのも楽しいね。この先、浪江に戻ったら、子どもたちが来なくなりそう心配だという気持ちはあるね。

る暇なくて。やることあるのは大事だね。
防犯見守り隊で毎週浪江の様子を見てるけど、除染したところ見るとすぐきれいで帰りたい。なるね。家はあんまり傷んでないから、帰ろうと思えば帰れるけど、仕事はない、学校はない。若者が帰らないと在の人はぼんぼんとしてしまうから心配だ。みんなが戻れば、スーパーもできる、畑もできるし、病院も原町に行けば困らないと思う。とりあえず、いったん復興公営住宅に入って、行ったり来たりしながら状況見て、帰れるようなら浪江に帰りたいと思う。ペットも住める復興公営住宅がもっとたくさんできて、次は抽選に当たるといいなあ。



村岡 一夫さん(加倉)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：8月31日 「平成27年10月 広報なみえ掲載」

きずなを大切にしつつ、今いる場所で元気に



▲小川町の借り上げアパートにて村岡一夫さん、久子さんご夫妻。一夫さんが朝採りした野菜を前に。

現在、埼玉県小川町で避難生活を送る村岡一夫さん夫妻。一夫さんは3年前、脳梗塞で入院しましたが、順調に回復し、野菜づくりやグラウンドゴルフを楽しんでおられます。来年は茨城県土浦市に新居を構える予定だそうです。

■避難に次ぐ避難

たくさんの方に助けていただき、今は元気に暮らしています。が、本当にいろいろなことがありました。

震災当日は家が潰れるかと思うほどの大揺れで、同じ敷地にある息子の家で一夜を明かしました。翌朝、防災無線の避難指示を聞いて津島の活性化センターに避難しましたが、息子が「早く遠くに逃げた方がいい」と言うので、娘の家族も一緒に車を連ねて本宮市の体育館へ。そして14日に息子の勤め先の支所がある新潟県柏崎に向かった

んです。宿泊先の当てもなく、食べ物もガソリンも不足し、吹雪の中、不安でいっぱいでした。柏崎では、息子の勤め先から紹介してもらった民宿に3月いっぱいお世話になりました。1週間ぶりに風呂に入り、食べられないほどの食事や古着などの支援物資もいただき、本当にありがたかったです。

■病気を機に気持ちを切り替えた

娘家族は今も柏崎に住んでいます。私たちが夫婦は公営住宅の抽選に外れてしまい、次の落ち着き先を探す必要がありました。そんな時、埼玉県小川町に避難した友人が「こっちに來たらどうか」と勧めてくれて、同じアパートに引っ越したんです。

初めは1年くらいで浪江に戻れると思っていました。帰りたくてたまらなくなりました。けれど先がまったく見えない状況で、つい晩酌の量が増えてしまっています。平成24年5月のことです。突然、しゃべろうとしても口が回らなくなり、病院で脳梗塞と診断されました。今も通院していますが、発見が早かったのほとんど後遺症も残らなかったのは幸いでした。

から畑を借りて野菜づくりを始め、週3回グラウンドゴルフに通ったり、草取りや河川の掃除など地域の活動にも参加したり。小川町の方にもとても良くしていただき、今いる場所で元気に生きようと気持ちを切り替えました。

■浪江の思い出、心のきずな

私は山登りと山菜採りが趣味で、浪江ではしょっちゅう山に登っていました。採った山菜やキノコをご近所に配って喜んでいただいたり、お返しに野菜をいただいたり。そういう楽しみがなくなってしまうのはなんとも悔しいけれど、思い出が消えることはありません。

浪江の皆さんと会える交流会には出来るだけ参加しています。なにより方言で気楽に話せるのが嬉しいですね。

私ども夫婦は今、茨城県の土浦市に土地を買い、10月に棟上げ式をする予定でおります。息子たち家族も茨城県内に引っ越しが決まっているので、孫の顔も時々見られるようになるのが楽しみです。これからは浪江の皆さんとのきずなを心の糧に、新しく知り合う方とも仲良くして元気な老後を過ごしたいと思っています。



福島県

瀬賀 範眞さん(津島)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原

取材日：10月8日 「平成27年11月 広報なみえ掲載」

自分を見つめて、 いい方向に考えなくてはいけない

平成23年8月号のころ通信で“先の見通しが立たない現実にも、慌てないでと心がける”と話されていた瀬賀さん。二本松市内の仮設住宅での暮らしも4年になりますが、昨年からの自治会長のほか、いろいろな役職も引き受けられてスケジュールに空きがないほど忙しい日々を送っていらっしゃいます。気負いする様子もなく、ごく自然体で、より良いやり方を工夫しながら取り組む前向きさと笑顔、気さくさで皆さんに頼られる存在です。



▲帰れるものなら津島に帰りたいね、と笑顔でお話くださった瀬賀さん

震災のため挙式を延期した長男も結婚して仕事の関係で山形に住み、孫が2人生まれました。青森の長女の所と合わせて孫は3人になります。コスモス保育園に勤めていた次男は福島市で保育士をしております。津島では、食品と雑貨を扱う瀬賀商店を家内と母が、山の木を切って販売する仕事は私がやっています。震災後に運搬用のトラック等は全て廃車にしました。津島なら仕事は次々と来ていたけれど、こんなになっ

ていたらできないね。考えてもしょうがないことは

いちいち考えない。過去を振り返らず、前向きに考えないといけないと思っています。

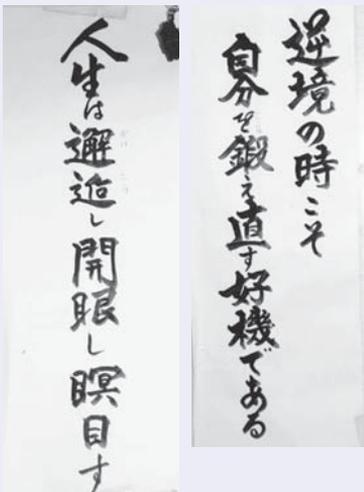
“人生は邂逅し開眼し瞑目す”
逆境の時こそ、自分を鍛え返す好機である”津島稲荷神社の宮司さんに書いてもらった言葉が気に入っています。自分を見つめて、良い方に考えてなくてはいけません。どん底にいる時こそ、自分を見極めて一つひとつやっていけば運が向いてくる、という意味だと思っています。

私が住んでいる安達仮設は世帯数が200ほど、約400人が暮らす、浪江では一番大きな仮設です。自治会長は2年目です。ここは、毎日いろいろな行事があるのでイベントにはできるだけ顔を出しています。きちつとするばかりでなくて、お酒を飲んで踊ったりもして楽しくやっています。自治会長をして良かったことは、津島の人だけでなく、いろいろ

いろいろな地区の浪江の人との出会いで交流が深まったことかな。仮設があるうちはここにいて、自治会長を続けてもいいかなと思っ

ています。が、やめると言う人がでなければね(笑)。今年、初めて国勢調査員を担当していて、150世帯ほどの担当を持っています。ほかにもやっていることがたくさんあるから、打ち合わせや活動がほとんど毎日あるけれど、負担にはならない、何でもないですよ。

これからのこと？帰れるなら帰るよ、津島にね。だけど帰還困難区域だからね。やっぱり、思い起こすのは津島の風景。目の前が山だったから、天王山が目に浮かぶね。紅葉はもう少し先かな。



▲「長い人生のなかでは、いろいろな人と出会いめぐり合い、少しずつ成長しながらやがては一生を終る」という意味が込められているそうです。



千葉県

加藤 進さん(西台)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：10月14日 「平成27年12月 広報なみえ掲載」

いつか浪江に帰りたい

釣りが趣味で、浪江にいる時は夫婦二人で、近くの高瀬川によく「アユ釣り」に出かけたという加藤さんご夫婦。今は、長男ご夫婦とお孫さんたちと6人で、千葉県野田市で暮らしています。



▲加藤進さん、壽美子さんご夫婦



▲愛車と一緒によ

■震災の日

未曾有の大災害と原子力事故から、早いもので4年6か月が過ぎました。あの日、私たち夫婦は二人で居間でテレビを見ていました。突然のすごい揺れと地鳴りの音に、無我夢中で外に飛び出しました。地震がおさまって家に入るとタンスや食器棚が倒れ、あちらこちらにガラスの破片が散乱し、足の踏み場もありませんでした。翌朝、防災無線が鳴り、「福島第一原子力発電所で異常事態が発生した

ので、ただちに津島地区の活性化センターに避難」と聞き、着の身着のまま避難しました。しばらくの後、今度は原子力発電所の建屋が爆発、川俣小学校への避難指示が出されました。道路は渋滞、ようやく小学校に着いたころは、夕暮れ時でした。役場職員から段ボール一枚と毛布一枚を渡され体育館の中に入ると大勢の人が避難していました。夜になると犬の啼く声や犬の飼い主に「出ていけ」と怒鳴る声が聞こえ、床の冷たさや寒さもあつて一睡もできませんでした。私も以前、犬を飼っていたので、泣く泣く体育館の外に犬を連れ出した人のことが他人事に思えませんでした。動物も家族と一緒になんです。残念でなりません。

震災翌日の朝、散歩していると、突然大きな声で「お父さん、お父さん！」と呼ぶ声がしました。誰だろうとふり返ると、新潟に住む次男でした。夜通し車を飛ばして迎えに来てくれたのです。その足で次男のアパートに向かい、1か月間、一緒に生活しました。現在は、長男夫婦と一緒に千葉で暮らしています。

■知らない土地での暮らし

ここでの暮らしも4年になりました。最初の一年間は、知らない土地で近隣の方たちのお付き合いもほとんどなく、ストレ

スが溜まりました。今は、孫の幼稚園の送り迎えや、カラオケ、公園に行つてのウォーキング、夫婦二人で釣りにと、自分たちの生活を楽しむようにしています。何より、孫の笑顔にやされています。

震災前は、東京電力の関連会社で仕事をしていたので、原発事故後の終息作業にも携わりました。事故前は、原子力発電所が近隣に住む人たちの暮らしを支えていました。事故があつて初めて、原子力発電所のリスクを感じた人がほとんどだと思います。

■いつか浪江に

いつかは、浪江の自宅に帰りたいですね。近くを流れる高瀬川に、夫婦でアユ釣りをしに、よく出かけました。千葉に来てからも、幼稚園の送迎がない日曜日には、夫婦で釣りに出かけたり、東京の博物館に出かけたりにしています。浪江とは風景が違います。山があり、川があり、海があり、自然の豊かさに囲まれた暮らしと今の暮らしでは各段の違いがあります。

後ろ向き気持になると、どんどん落ち込んでしまします。いつか帰るんだと自分に言い聞かせながら、今の暮らしを楽しみたいと思います。



高橋 正俊さん・美恵子さん(赤宇木)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：10月20日 「平成27年12月 広報なみえ掲載」

生きていく上での怖さやリスクはあるけど、 楽しいこともある。それを活かしてやっていくよ

「もう一遍福島でやっていたことをやろう」。避難中にそう思い、たどり着いた北の大地、北海道置戸町。もともと動物を育てて生計を立てようと、福島では放牧牛を飼っていた正俊さん。その経験をもとに置戸では山羊を飼い、大自然に囲まれた生活を奥様の美恵子さんと一緒に始められました。



▲お二人にすっかり懐いている山羊たち
▶2年がかりで建てたお住まい。敷地の左手奥にはプライベートゲレンデが広がる



■ご縁やタイミング
みなな上手く合ったんだね
震災があつて避難して、伝手を頼りに仮住まいしていたけど、人の家なので何にもできなくてだんだん嫌になってきたんです。それならもう一遍福島でやっていたことをやろう！と思い、同じ位の土地を探して日本中回ったんです。福島では十町歩の土地で牛を飼っていました。補償もはつきりしていなかったのだから買えるかわからない。安くて広い所は見つからず、最終的には北海道だろうと。

夏に一度北海道に行った時に知り合いができて、冬にその知り合いを頼って、2月の一番寒い時に1か月間、上士幌町がやってい

る移住体験で教員住宅の空いているところに安い費用で住まわせてもらったんです。そのうち「置戸は、町の助成も多いし土地もあるし安い」という話を聞き、置戸で牛と羊を飼っている人の連絡先を教えてくださいました。それが今のお隣さん。

最初は離農する人を紹介してもらったけど話が立ち消えに。その時、「俺も持っている土地を少し貸してあげる」とお隣さんが貸してくれたのが、福島と同じ十町歩のこの土地だったんです。でも、借りたはいいいけど、自分のものにしたほうがなんでもやるのが張り合いになるので、売ってくれと話しをして、最終的に了解してもらいこの土地を手に入れたんです。

この家が完成するまでは、別なところに寝泊まりしながらここに通って家を造って、ようやく住めるようになったという経緯です。妻も今年の3月で仕事を辞め、9月からこっちに来ています。ご縁とかタイミングとかそういうのがみんな上手く合わないところに住むことはなかったと思いますね。

■山羊と自然に囲まれ、夫婦で楽しく
もう一遍牛を飼おうと思ったけど、体力が追いつかないと思って山羊にしたんです。山羊は北海道に合ってるね。寒さに強いしど

んな草でも食べる。山羊を飼うのは初めてだけど、だんだん生態もわかってきて、来年の冬には子山羊が生まれるはず。生まれ具合や世話の手間のかかり具合をみて何頭位にするか決めなきゃいけない。それにあわせて山羊小屋も作らなきゃならないね。あとチーズを作る所も。山羊のお乳でヨーグルトを作って、二人でそういう食生活していくのもすごくいいなと思ってね。他に野菜類ももう少し作らなきゃいけないし、裏手を果樹園にする予定で、梅、杏、ブルーベリーとかちよつと限られるけど適当にいいのを選んで育てたいね。花も広げて春になるとカラフルな感じの家の周りになって、見た目にも楽しめるようになればと思つて。やることいっぱいあるね。



浪江大吉SSB チームおおとり鳳 小荒井雅治さん(権現堂)
浪江大吉SSB チームらん蘭 島田 有紀さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 結城
取材日：10月4日 「平成27年12月 広報なみえ掲載」

この時ばかりは何もかも忘れ熱中できます 私たちにとっては年1回の栄養ドリンクです

曇一つない秋晴れのもと、10月4日に山形県高島町にて高島町総合体育祭・ソフトボールの部が開催され、『浪江大吉SSB』のメンバーに助っ人選手を加え、浪江町から2チームが出場しました。チーム代表が高島町へ避難したことがきっかけで出場を始めた大会も今回で5年目。若手のメンバーも増え、着実に次の世代へ受け継がれています。「何十年先も若手が継承し、続いていけるチームに成長してほしい！」そんな熱き思いを語った若手のホープ島田さんと、静かにチームの成長を見守ってきた、先輩の小荒井さんにお話を伺いました。

◆大会に対する思い、チームへの思いは？
小荒井 去年は仕事の都合で参加できず、2年ぶりの参加です。今年は何としても出たかったので、会社に「この日だけはお休みをください！」と事前にお願いをして駆けつけました。チームメイトとは久しぶりの再会ですが、新しいメンバーも増えて活気を感じます。今回は若手も多く、頼もしい限りです。常に全力投球の若手には元気がもらえます。今日はメンバー混合で、即席で2チームを作りましたが、みんなスポーツマンなので、呼吸を合わせ即座に連携できています。エースは本日お休みですが、精一杯頑張ります。高島大会では、優勝とか結果にこだわらず、お互い交流を図り、とにかく楽しむことが大切だと思っています。



▲小荒井雅治さん

島田 今回で5回目、2011年の初年度から、休まず毎年参加しているので皆勤賞だと思います。今年も、2チームの中の1つの監督という大役を仰せつかったのですが、この日のために仕事をやり繰りし大会に臨みました。試合は「とにかく楽しく」、ムードづくりをし、皆の気持ちを盛り上げたいです。自分が任された「チーム蘭」は20代の若手が多く、遠く千葉県や神奈川県から駆けつけてくれました。自分も18歳の時にチーム代表の松崎さんとのご縁で加入しました。相馬、二本松、水戸など5チームに所属していますが、地元という理由で、浪江SSBが一番思い入れも深いですね。これから先も若手が継承し、続いていける永久不滅のチームになつてほしいと思っています。このチームに出会えたおかげ



▲島田有紀さん



▲チームメンバーとSSBガールズ

◆高島町への感謝
小荒井 毎年この季節になると、「ソフトボールの時期が来たなあ」と、とても楽しみにしています。大会出場は5年目に入りましたが、高島町には毎年受け入れていただいて本当に感謝しています。高島の方は温かいですね。昼食やおみやげなど、毎回おもてなしをいただいています。

で、友人もたくさんできました。メールなどで連絡を取り合っているときが楽しいですね。共通の話題でつながっている人とは話も盛り上がりやすいです。スポーツを通じた交流は、仕事では味わえない、自分にとってかけがえのないものになっています。



島田 毎年この大会に招いてくれる高島町へは、感謝の気持ちでいっぱいです。いつかは恩返しをしたいですね。この大会へ橋渡ししてくれた居酒屋大吉の店長へも、いつもありがとうございます。言いたいです。

◆ふるさとへの思いは？

小荒井 自分にとつて、ふるさととはかけがえのないもので、何かにつけて思い出します。浪江が消えてしまうのではない心配です。戻りたい気持ちが強いですが、ようやく今の生活に慣

れ、段々と気持ちが薄れてきたかもしれない。今の地域にもなじみ、知り合いも少しずつ増えました。帰還への思いは人それぞれ。若い人は自由に動けませんが、お年寄りは早く戻りたいのではないのでしょうか。震災後、郡山市で再就職し、ゼロからのスタートをしました。最近「まずは避難先で仕事や生活基盤づくりを頑張ろう」という思いが強いです。厳しい現実で生きている中、高島ソフトボール大会は年一回の栄養ドリンクのようなものです。この時ばかりは何もかも忘れ、ソフトボールに夢中になれる。

島田 ふるさと浪江のことは片時も忘れたことはありません。思い出もたくさん詰まっています、やはり地元が一番です。大学時代も浪江から二本松に自宅通学をしていました。今は仕事の都合で郡山市に移り住んで2年目になります。両親は避難のため二本松市に離れています

が、元気に暮らしています。家族内では、帰還のことや自宅のことなど、浪江の話が尽きません。10月31日に浪江町でソフトボール大会があり、地元に戻れるのを今から楽しみにしています。



左が菊地秀徳さん、
右が阿部高士さん

菅野康雄さん

お世話になった方々からメッセージをいただきました

●高島町ソフトボール協会 会長 菅野康雄さん

本日は遠方よりようこそお越しくございました。毎年、選手たちには大会を盛り上げてもらい大変ありがたく思っています。高島町の選手たちにも良い刺激になっています。高島町は夏場が暑く、冬は雪深いため、避難されてきた方々も大変だったと思います。ここにいる選手たちは自然とけ込み、こちらの風土にもすっかりなじんでいる感じです。10月31日の大会へのご招待のお話を伺い、とても光栄であり、ありがたく感じています。再会を楽しみにしております。

●高島町体育協会 会長 菊地秀徳さん

ようこそ高島町へ。遠方よりお越しいただきありがとうございます。浪江の選手たちには、町総合体育大会（ソフトボール）を毎年にごやかにしてもらい本当に助かっています。今年で2・3回目となりますが、初年度より違和感なく盛り上げてもらっています。今年は2チームで編成していただき、県外各地からお集まりいただいたようです。掛け声もはつらつとしていて、我々も逆に元気をもらっています。また来年もお会いしたいですね。お待ちしております。

●浪江町ソフトボール協会 会長 阿部高士さん

毎年この時期に浪江の選手たちが参加させてもらい、とても感謝しています。芋煮の振舞いやお米の贈呈など、選手たちが楽しめるような細やかな気配りもありがたいですね。避難当初は「これからどうしよう」といった状態だったと思うが、ソフトボールを通して元気をもらい、避難によるストレス解消にも役立ったと聞いています。10月31日には浪江町で協会主催の大会を開催しますが、これまでの感謝を込めて、高島町のチームをぜひご招待申し上げたい。浪江町で再会できるのを楽しみにしております。



込堂 忠男さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：11月16日 「平成28年1月 広報なみえ掲載」

避難の間、「こんなにして貰って」と 人の温かさを実感したよ

震災前は妻と息子さん、娘さんと孫2人の6人家族で暮らしていましたが、今は今年7月に完成した福島市のご自宅で妻の京子さんとお二人です。それでも、千葉にいても頻繁に帰宅する長男や相馬に住む次男、娘さんや孫たちが住む宇都宮から集まり易い福島市の家が良いとおっしゃいます。



▲「やっと落ち着きました。ホッとしています」と
妻の京子さん

◆避難所は、寒いなんてものじゃ
なかった

あの震災が起きた時は、浪江
中学校の体育館で卒業式の後片
づけをしていたよ。お母さん
(妻の京子さん)は迎えに行っ
た孫と帰宅していた。双葉の薬
局に勤めていた娘は山道を通っ
て何とか帰宅して、夜明けには
長男も帰って来て、皆無事だっ
た。

停電している上に余震が何度
もあり、家族で避難所に行っ
たけれど、ストープは1個だけ。
トイレの水は出ず、何とかして

くれと周りに言われてもどうに
もならなかったし、一晚ここに
本当に居れるだろうかと思っ
たね。

高瀬にある実家が倒壊し、親
戚合せて20人近くが葛尾村の親
戚を頼ったよ。その後直ぐに姪
が嫁いだ会津若松に避難した。
その嫁ぎ先の家は大工の棟梁
で、いろいろ手を掛けた広い家
だったものだから、26人くらい
の親戚が世話になったんだ。炊
事や買い出しなどは当番を決め
て、夜が明けない頃からガソリ
ンスタンドに並んだりしたな。
雪がある生活に慣れていなかっ
たから、10日程で夫婦二人で妹
の嫁ぎ先の静岡県伊豆市へ移っ
たよ。修善寺に一軒家を借り
て、小さな畑をしたり、釣りを
楽しんだりした。自分で作った
“北あかり(じゃがいも)”など
を福島市の地元の人たちに送る
と喜ばれたな。

◆伊豆の人たちや地域の応援は、
本当に有り難かったよ

私は土木関係の会社や運輸会
社の仕事が長かったが、楽しみ
はもっぱら釣りだった。あちこ
ち行ったが、中でも南相馬市の
真野川の河口に友人がモーター

ボートを係留していて、鹿島の
東北電力原町火力発電所の辺り
には良く行ったよ。鯉や秋刀魚
も釣れて楽しかったな。

修善寺から程近い土肥は、浪
江の海にはいない槍烏賊や太刀
魚が面白いように釣れる所だっ
たな。家賃は伊豆市から支援を
受けて5DKで3万円だったの
で、結局2年7か月世話になっ
たよ。

ただ、伊豆から浪江町に通う
時に、車で首都圏を通り抜ける
のが何とも億劫だったので、福
島に戻る決心をしたんだ。横浜
周辺で開催される福島県の避難
者交流会にも何度か行ったし、
浪江町役場なども時折訪ねて家
を探したよ。ようやく福島市森
合に見つかり、その後、この家
を買うことになったんだ。

町の除染や放射線量の低下は
先のことだと思ってるし、家
は荒れる一方。孫が訪ねて来ら
れないようでは、浪江に帰って
も仕方ないと思ってるよ。嬉
しいことに、この福島の家の方
所には結構同級生がいるし、妻
の姉さんも近くだし、何より子
どもたちや孫が来易いのがいい
ね。



鈴木 俊哉さん(川添)

取材者：浪江町役場 鳴原
取材日：12月14日 「平成28年1月 広報なみえ掲載」

町の復興を信じて仕事をしています

浪江町役場新規職員として、復興推進課まちづくり整備係で勤務している鈴木さん。生まれ育った浪江のために働きたいという思いで仕事に就き8か月が過ぎました。若き役場のエースにこれまでとこれからの想いをうかがいました。



▲「毎日が勉強」という鈴木さん

震災時は大学1年で福島市のアパートにいました。家族とは連絡がつかず、停電のため津波のことを知ったのは夜になってからでした。両親や隣に住んでいた祖父母の状況がわからず、それこそ生きているかどうかさえわからなかったので心配な気持ちを抱えたまま過ごしました。翌日に連絡が取れた時は、本当にほっとしました。大学には美術の教師になるつもりで進学し、浪江には戻らないだろうと考えていました。震

災直後、「浪江町は今後二度と住めないだろう」という噂を聞いて、喪失感に見舞われ、その時初めて浪江を故郷として意識したように思います。でも、教えることが好きだったので、当時はまだ教師になる気持ちでいました。その後、中学校に教育実習へ行き実際に教師としての立場に立ってみると、教師は自分に向かないのではないかと悩み、将来の目的を一度失ってしまいました。それから自分は何をやりたいのだろうとじっくり考えました。役場職員になろうと思ったきっかけは、せっかく仕事をやるなら自分にとって働くことに意義があることをしたい、地元のために働きたいと思ったからです。そう決意はしたものの、まったく分野が違う勉強をしていたので、もう一度ゼロから勉強をし直し、試験を受けて今年度採用となりました。

4月1日の辞令交付で復興推進課に配属されました。町の復興の役に立てればと思って就いた仕事だったので、その目的が一番近くて達成できる課で良かったと思います。仕事は想像していたよりも大変で、仕事量の多さ、終わりの見えない果てしなく続く感じ、今やっていることが陽の目を見るのだろうかかと不安になることも正直あります。でも、町の復興を信じてやっているのです。町民の皆さんにはどうせだめだろうと思わずに町をあきらめないでほしいと思います。

自分が浪江町で一番に思い浮かぶのは、自転車がよく行っていたマリナーパークです。小さい頃はプラネタリウム、小学生・中学生では剣道のスポ少や部活での打ち上げのバーベキュー、また、家族でフリーマーケットに出店したり、イベントでウナギのつかみ取りをしたり…。年を追うごとに関わりかたは変わっていきましたが、思い出している皆さんの記憶に残っています。そんなふるさと浪江町の復興の役に立てるように、今は早く仕事を覚えて復興推進課の戦力になれるように頑張りたいと思います。



橋本由利子さん(川添)・鈴木 昭孝さん(権現堂)

取材者：NPO法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：10月25日 「平成28年1月 広報なみえ掲載」

～支援から始縁へ～ あれから5年。私たちは「仲間」になりました

「今年も、東北から仲間が応援に来てくれました！」嬉しい文字が躍る祭りのパンフレット。2011年秋、福岡県久留米市のポレポレ祭りに初めて浪江の皆さんが参加されてから、5回目を迎えます。この間、仲間の輪は広がり・繋がり・深まり続けました。



橋本由利子さん



鈴木 昭孝さん

◆ポレポレ祭りに参加して

橋本 コーヒータイムの仕事として日頃取り組んでいる「ポールの糸巻き」を、今回は「ものづくりワークショップ」という新しい切り口で開催していただき、メンバーと共にワクワクしてやって来ました。私たちに出来る技術を使って、ワークショップの参加者に楽しんでもらえる。それを間近で感じることは、メンバーにも私にも大きな喜びです。

鈴木 この祭りへのつなぎは、橋本さんによるもの。旭屋の仕事をコーヒータイムさんにお願いでいたご縁から、「一緒に福岡へ行こう。一緒に焼そば、焼こう」と声がけてもらったんです。

今日、何人も「これを食べるために来たんだよ」「本物が食

べられて嬉しい。ありがとう」と言ってくださり、こちらこそ嬉しいね。「こんなに美味しいとは思わなかった」と、わざわざ言い戻ってきてくださった時には感激すると同時に、ホッとしたよ。

◆橋本

今日は子どもの声や笑顔があふれますね。こんな雰囲気は久しぶり。今住んでいる仮設住宅でも職場の周りでも、子どもの姿はとも少ないの。朝からずっと楽しくて「はい、チーズ」って言わなくても、ほら、いい笑顔でしょ。ね。

福岡の皆さんと知り合うきっかけは震災という悲しい出来事だけど、こうして繋がりができたと縁に感謝です。

◆鈴木

私は九州の人・全国の人に本物の浪江の味を知って欲しい。B-1グランプリで焼そばによるまちおこしが有名になったでしょ。でも「よし、本場へ食べに行こう」と思ってもらったって、その町がないわけだから。自分たちからイベントに出て行って、浪江が・なみえ焼そばが消えないようにしたいんです。

◆ふるさとへの思い

橋本 私は、子供や孫にふるさと浪江を引き継ぎたい・浪江町をなんとか残したいと思ってるの。いろんな方がおっしゃっているように、「町のこし」ね。目を閉じると、あの山が見える・川の音が聞こえる・花の香りがするのよ。それで、あっちへ行きこっちへ行くの自分の活動が少しでも浪江のお役に立てば、と思ってます。

◆鈴木

帰る・帰らないでは表現できないね。たとえ住めなくても、盆暮れには戻り、懐かしいなあと思ってる。寝転がりたい。誰もふるさとを捨ててはいない。遠く離れていても忘れはしない。だから、浪江のために自分のできることをやるよ。

◆これからのこと

橋本 コーヒータイムは、震災後「たのしいことすっぺい」をキャッチフレーズに、悩みながらも元気にやっています。それを声高にアピールするのではなく、我々の活動を遠目に見ていただいで、何かを感じてもらえればいいなあ。そうそう、今回の参加をきっかけとして、「ものづくりワークショップ」活動



▲大好評・完売のなみえ焼そば



▲初めてのワークショップも大成功

を事業化したいと考えてます。日本中に出かけて笑顔のイベントを通して、障がい者と健康者、そして被災者と震災を知らない方を繋ぎたいですね。

鈴木 もっとなみえ焼そばを大衆化して、日本中でイベントをやりたい。『食べてみる↓美味しい↓浪江ってどんな町だったんだろう』と、関心を持ってもらえるでしょ。今日、「美味しかった」と言ってくれたお客さんも、これからは『浪江』という言葉に反応してくれるんじゃないかな。

◆浪江の皆さんへ

橋本 来年はコーヒータイトム開設十周年。現在お借りしている二本松市金色の事務所から、すぐ近所ですけど移転します。広くなるので仲間も増えることができるし、ボランティアさんにもたくさん来ていただきたい。内装は、木を使って温かい雰囲気になりますよ。完成したら、浪江の皆さん、そして福岡の皆さん、ぜひ、遊びに来てください。

鈴木 来年はここで、浪江町の人に懐かしい焼そばを食べて欲しい。張り切って焼くよ！この味が、ふるさとを離れた人の心に、思い出を蘇らせるんだ。きつと！



北岡さとみ（出会いの場ポレポレ管理者）

当法人は、2011年3月以降、数回に分けて東北支援に職員を派遣しています。この流れの中で「全町民が避難している町の福祉作業所のことを知って欲しい」と、コーヒータイトム代表の橋本さんを紹介されたことから、お付き合いが始まりました。当初は「お祭りにご招待して、少しの時間でも震災のことを忘れて元気になってもらいたい」と思っていました。でも今は、「祭を盛り上げに来てくださっている」と捉えていますし、私達が元気をもらっています。この縁をこれからどのように繋げていくのが、あらためて考

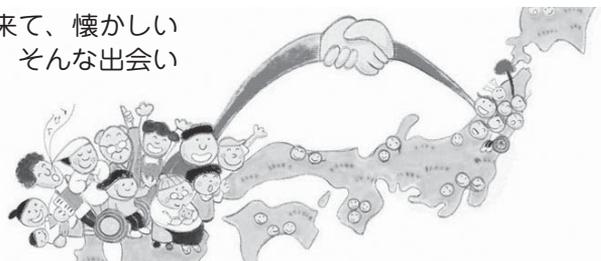
える時期にきていると思います。

私は震災の年に出産しました。これから先、息子が小学校に入学し、やがて成人式を迎えるその度に、「ああ6年経った。20年過ぎた。あの町、あの景色、今はどうなったのだろう。あの方は、どこで過ごしておられるだろう」そう思うでしょうね。

こちらに避難しておられる浪江町の方々が遊びに来て、懐かしい顔に出会う、新しい友達ができる。ポレポレ祭りが、そんな出会いの場になればいいな、と思っています。

～「出会いの場ポレポレ」～

福岡県久留米市に2001年に開所された障害福祉サービス事業所。毎年秋に、誰もが混ざりあい支え合う地域づくりの一環として、地域住民・企業・学校などと連携し、「ポレポレ祭り」を開催。





福島県

根本 昌幸さん(苅宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・田村

取材日：12月4日 「平成28年1月 広報なみえ掲載」

避難体験者の言葉を伝える

詩人として活躍されている根本さんご夫妻に初めてお会いしたのは、震災のあった2011年9月でした。あれから4年、再びお目にかかってその後の様子などをお聞きしました。

当時、相馬市の借上げ住宅と一緒に避難されていたお母様は、残念なことに今年の1月、南相馬市の高齢者グループホームで亡くなりました。そして元気に走り回っていた愛犬のコちゃんは今もう13歳。年月の長さを感じる再会になりました。



▲根本昌幸さん、洋子(筆名 みうらひろこ)さん



▲洋子さんから「こんなに成長した郁弥を見て欲しい」と写真を預かりました

以前の家は浪江の家の景色と
りました。相馬市立向陽中学校のバレー部は部員が減り、休部か廃部かという危機にありましたが、郁弥ら1年生が6人入部し、今年は新人ながらも県大会に出場しました。

■前回お会いできなかった孫の郁弥君はどうされていますか

今回も部活で留守にしており残念ですが、もう中学1年生になりました。

小学校の頃は野球部に所属し、選抜で東北大会まで行ったのに、中学に入学したら親しい友だちと一緒にバレー部に入

よく似ていて、私たち夫婦は大変気に入ってしまいました。郁弥も慣れたところでしたが、家の契約更新を機に、進学する中学校の学区内に移るため、妻の洋子が懸命に探してこの家を購入し転居しました。

■作詞された「ふるさと浪江」は本当によく歌われていますね

2011年に取材を受けた後にレコーディングをしました。が、おかげさまでCDが発売されてからは、あちらこちらの浪江の集いや復興祭などで歌って頂いています。

「よく作ってくれた」という感謝の電話や「泣けてくる」という感想も頂きました。作曲された原田直之先生もNHKの番組で歌ってくださってラジオの深夜放送からもこの歌が広まりました。本当に嬉しいことです。

避難された方々がよく歌ってくださいなのですが、本当にみなさん遅いですね。俳句や歌、料理、手芸など何かすることで苦しい心を前向きに変えてい

■2013年暮れに詩集『荒野に立ちてわが浪江町』をお出しになりましたね

浪江町「広報なみえ」にも出版の記事を載せて頂きました。

有り難いことです。

妻も今年の8月に本を出しました。『渚の午後』という詩集ですが、帯は南相馬市に暮らす作家の柳美里さんが書いてくださいました。柳さんにお願ひする際には、浪江の家や「復興なみえ十日市」に案内をしたりしました。

私はこれまで歌の作詞の仕事が多かったこともあり、情緒的な作品を作ってきたように思いますが、震災と原発事故以降、社会派と言われる作風が変わってきたように思います。東電が引き起こした事故や避難のことも時代を切り取った作品を今後も作りたいと考えています。

そして前回もお話ししましたが、避難所で1個のメロンパンを4人で分け合ったことなど、逃げて避難をした者だからこそ言葉紡ぎたい、伝えたいと思います。これは妻も同じで、避難者としての視点を持ち続けたいと話しています。

浪江に戻ることについては非常に迷っていますが、孫を育てているうちは無理かもしれませんが、相馬藩士の末裔として先祖代々受け継いできた家や残してきた蔵書には大いに未練がありますが、ここ相馬では近所の方々ははじめ、いろいろな人に恵まれて暮らしています。



千葉県

石井 壯明さん・貞子さん(西台)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：12月4日 「平成28年2月 広報なみえ掲載」

浪江が好きだから

震災前、「双葉ギフト」を経営。浪江町と富岡町に店舗を持ち営業していた石井さんご夫婦。今は、千葉県成田市に家を新築、夫婦二人で暮らしています。壯明さんのお父さんと妹さんも同じ敷地内に家を建て、行き来する日々です。



▲成田で開催されたマラソン大会で3位に入賞!!

▶浪江町で開業していた時のカタログ



◆**壯明さん**
震災後、父、妹、妻と長男の5人、津島の体育館に一時避難した後、猪苗代の中ノ沢温泉、燕三条のホテルに避難、取引先のメーカーの厚意で、一軒家を提供してもらい、3週間ほどお世話にもなりました。その後、千葉県印西市に暮らす叔母を頼って、成田市のUR※の団地に入居しました。それから4年、3か月前にURの団地から徒歩5分のこの場所に新居を建てました。父と妹も同じ敷地内に建てた家で暮らしています。この土地の元の持ち主は、いわき出身の人、仲介してくれた不動産屋さんには会津出身、偶然のことですが、安心できました。浪江と成田は気候が似ていま

す。温暖で、雪が降っても1回か2回、すぐに消えてしまいません。歩いて行ける所に大きな病院もあり、父が通院するにも便利です。「双葉ギフト」は、私が30年前に起業、富岡と浪江の2か所に店舗を構えるまでになりました。成人した長男も一緒に仕事をしようになり、代を譲るのも間もなく思っていた時に、震災が起こりました。私の代で、浪江に帰り営業再開することは難しいと諦め、千葉に家を建てました。今、浪江の店舗は、「思い出の品展示場」として町役場に使用してもらっています。ネガティブに考えると、どんどん落ち込んでしまいます。何事もポジティブシンキングです。お店をやっていた時には、ゆっくりとご飯を食べることなく、営業に走り回っていました。体調も良くなかったです。今は、マラソンや合唱を仲間たちと楽しむ日々。毎日10km、家の周辺を走っているの、太目だったお腹も引っ込みました。成田空港からは、国内線の運輸も多いので、札幌で働いている長男の所や、旅行にも気軽にかけられることができます。

◆**貞子さん**
震災前、店舗管理は私が担当、夫は営業に走り回っていました。朝から晩まで仕事に追われていましたから、2人の息子たちの剣道の試合を見に行くこともなかなかできず、保護者の仲間から、結果を覚えてもらうこともありました。店舗が富岡と浪江の2か所にあり、いつも原発の前を通って行き来して仕事をしていました。こんなことになるなんて夢にも思いませんでした。実家の両親は、桑折町の仮設住宅に避難しましたが、介護が必要だった父は、一週間後に亡くなってしまいました。今は、母が一人で南相馬の仮設住宅で暮らしています。もうすぐ80歳ですが、元気でいてくれるのが何よりです。

◆**浪江が好きだから**
震災後、長男は以前働いていたギフトメーカーから、戻って働かないかと、声を掛けられ、今は札幌で働いています。「浪江が好きだから、できる時が来たら帰って店を再開したい」と息子は言います。浪江には、お墓もあります。私たちの代では無理でも、息子の代になったら、震災前のように店舗営業ができたらと願っています。どこで暮らすしても、思い出は浪江にあります。

※UR(都市再生機構) 2004年7月に都市基盤整備公団と地域振興整備公団の一部が一つになって設立された独立行政法人。



長崎県

吉田 典子さん(川添)

取材者：NPO法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永・村上
取材日：12月19日 「平成28年2月 広報なみえ掲載」

ゆっくり 生きています

「ここに来るまで、心がいっぱいいっぱいでしたが、ゆっくり空や海を眺めていると、自分の中で何かが大きく変わったことを実感します。浪江の皆さん、決して近い距離ではありませんが、高島へ遊びにいらっしゃいませんか」

あの日から決して平坦ではなかった道を、音楽と・仲間と共に歩き、今、典子さんの瞳は、夕陽に染まった高島の海に負けないくらい輝いています。



◆あの日からのこと

浪江に住んでいた頃は、川内村と葛尾村の中学校で音楽科の非常勤講師をし、浪江の大事な仲間たちと「bar NAMIEKEN」で語ったり、音楽を聞いて楽しんだり、私が所属する音楽グループ（RAINBOW MUSIC）でLIVEをさせてもらったりと、私の生活にはいつも音楽がありました。ただ、あの震災・原発事故があり、友人たちもみんなバラバラになり、いろいろな事が一変し、自分の中で何もかも整理がつかなくなりました。そんな中で、音楽ができない状況も、音楽をできずにいる自分自身にも嫌になった時期が続く、自分の心の整理もつかないのに、教壇に立つて子どもたちと向き合うなんてできないと感じ、教職から離れ、自分自身の音楽の勉強（ボイストレーニング）をやり直そうと思いました。技術を磨くのと同時に、心を整えていたんだと思います。

◆一歩踏み出せたきっかけ

ずっと私の音楽を応援してくださっていた親友のお父さんに「おまえらが歌わなくて誰が歌う

んだ」と、背中を押していただき、仲間と「FUKUSHIMA」という曲を完成させ、2012年12月、縁あって九州ツアーを組んでいただき、福岡、佐賀、長崎で、「感謝」の思いを込めて歌わせていただきました。その流れの中で高島を紹介してもらったのです。音楽をやってきた皆さんの縁が、私をこの島へ繋げてくれました。

◆高島での生活

全校生徒7名の高島中学校と、隣の伊王島の中学校で音楽科非常勤講師をやりながら、島のおいしいちゃんおばあちゃんの健康維持のための合唱団を作っ

て指導をしたり、音楽ライブ活動も再開しました。音楽と豊かな自然と温かい人々に囲まれて、ゆっくり暮らしています。私が福島から来たことを島の方々はご存知ですけど、当時のことを聞いてくる方はいます。原爆・原発・・・深く話さなくても通じるものがあるのかな、と思います。

◆これからのこと

ここに来た当初、島の人から「何でこんなところに来たの？」

と、よく聞かれました。その度には「え、素敵なところじゃないですか！」と答えていました。確かに「離島」と聞くと、何もないイメージが強い。でも何もなければこそ、自分で何かを見つけて何かをやり遂げる事ができる。そこが魅力なんだと思います。島外から来て、そして島内に住んでみたら、そのことに気づけたんだと思います。浪江も、そう。離れて初めて気づかされました。どれだけ自分の故郷は素敵な場所だったかを。そして、当たり前なんて存在しないということ。故郷への想いが今の私の原動力かと思えます。『いつか何かやれるその時のために、力を蓄えてるんだ』と。これからも縁を大切に、自分で選んだ道、ゆっくりと歩いていこうと思います。



▲発売中のCDとコンサート終了後の仲間たち



鈴木 莊司さん・みよ子さん(幾世橋)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：12月14日 「平成28年2月 広報なみえ掲載」

お互いに遠慮せず、絆を深め合いましょう！

震災前は、消防署近くで商店を運営されていた鈴木さん。その後、仙台市に移り住み、現在は仙台市太白区に新築した自宅に、夫婦二人で暮らしています。震災から約5年経つ今だからこそ、「絆」を大切に未来につなげていきたい、という強い思いをお持ちになっています。



▲新築した自宅のリビングルームで

◆久々の再会

つい先日、福島に知人に会いに行ってきました。震災前に毎日お店にお越しくださっていた方が今はお元氣かな、どうされているかなと思ったからです。また、浪江の同級生である無二の親友たちとも再会してきました。昔話が尽きなく楽しい時間を過ごしてきたところです。今、まわりを見渡してみているのは、「絆」が薄れてきているんじゃないかな、ということ。会いたい・今どうしているのかな、と思っはみるもの、お互いに遠慮して「会おう」とい

う一言が伝えにくくなっているなど感じます。

宮城県には約700人の浪江町民が暮らしていて、花見やお茶会を有志で実施しています。私たちも予定が合う時は参加しています。このようなゆるい繋がりが継続して、さらにお互いが元気づけ合えればいいですね。

我が家は常磐自動車道路の名取インターから車で5分なので、お世話になった皆さん、お気軽にぜひいらしてください。連絡をお待ちしています。

◆現在の普段の暮らし

自宅を新築したのは平成26年7月。以前住んでいた集合住宅から遠くないので環境にも慣れました。近くには、知り合いや同級生、親族も住んでいるので安心です。庭には、小さな菜園を作り、野菜の成長や収穫を楽しんでいるところです。一緒に暮らしていた息子は、仕事のため現在は原町に住んでいます。私（莊司さん）は、何かやっていないと余計なことを考えてマイナス思考になってしまうので、趣味を楽しむようにしています。海釣り、パソコン、プールでのウォーキング、散歩など。私（みよ子さん）は、夫と

一緒に散歩に出かけるのが楽しみ。以前は一時体調を崩した時期がありました。今は元気に過ごしています。浪江で暮らしていた時よりも、だいぶスローになりましたね。

◆浪江に帰ったら「お茶飲みの場」を

今、私たちはゆくゆくは浪江に帰りたいと思っています。まず、戻れる私たちが暮らし始めれば、今後若い世代の人たちも戻ってきやすくなるのではないのでしょうか。

浪江の自宅は、お店は壊さずに住居の平屋部分を建て替えようかと検討中。自宅は復興拠点になる役場の近くにあるので、知り合いなどに気軽に立ち寄りてもらえる「お茶飲み場」などができたらと考えています。妻（みよ子さん）は、人の顔をしっかりと覚えていて人当たりも良いので、お茶飲み場が雰囲気の良い空間になるのでは、と期待しています。

人と人とのつながりをこれからも大切にして、浪江町の復興計画が「絵に描いた餅」にならないように、町や町民の復興のために協力をしていきたいと思っています。



広島県

渡部 洋行さん・恵子さん(北幾世橋)

取材者：ひろしま市民活動ネットワークHEART to HEART 竹内・中倉
取材日：12月15日 「平成28年2月 広報なみえ掲載」

自由に暮らしています！



▲お二人並んで笑顔のツーショット！

原発事故後間もなく、広島県安芸郡坂町の公営住宅に移られた渡部さんご夫婦。ご主人の洋行さんは寝たり起きたりの生活ですが、妻の恵子さんはご主人のお世話をしたり、ご近所さんと話しをしたりと、パワフルに日々の生活を送っています。

◆亀ちゃんのこと

亀ちゃん(12月1日号掲載の吉田亀雄さん)には随分前から良くしてもらっているの。お父さん(洋行さん)と仕事の同僚だったから、前から仲良し。普段からタブレットやLINEでもしょっちゅうやりとりして。昨年は、亀ちゃんと身体が不自由なお父さんと私で黒部ダムへ行きました。亀ちゃんに段取りしてもらって、景色も良

かったし(紅葉はまだだったけど)、とても良い旅でしたよ。俳句まで作っちゃった。

「秋日和 黒部の旅路 友の蔭」

◆坂町に来てからのこと

次男が自衛隊にいた縁で、原発事故後の3月下旬には現在の住宅に入居しました。当初は近くのお好み焼き屋で働いていたけど、「広島に原爆が投下された時、福島の人は何もしてくれなかったから(お好み焼きは)食べないよ」と言われたこともあり、その後辞めました。今はお父さんのお世話と家事をします。ずっと自宅に居るので、団地アパートの住民を自宅に招いてお茶を飲みながら喋っているの。玄関にはちゃんと表札を出して、扉は開放して、「お茶しない？」って声をかけるわけ。時には「なんで扉を開けておくの？」と聞かれることもあるけど、浪江では当たり前だったから。今では団地のことは全部わかる(笑)。長男は2年前に結婚して、矢野(広島市安芸区)にいますよ。

浪江にも帰ることはありません

す。東電への書類を提出しに行かねばならないし、わからないことは相談せねばならないので。だけどお父さんのお世話もあるので、移動だけでも大変です。

◆浪江の我が家のこと

我が家は放射線量が高く、とても住めない。東電のGM計数管で計測すればわかるんだけど、誰か計ってくれないかなあ。この線量では到底住めるわけがないので、できれば土地を買ってもらいたい。廃棄物を埋めてもらってもいいと思っています。近くの人は浪江に帰りたいと言っているけど、帰っても水は飲めないし、住む環境は整わないでしょう。自宅の写真は持ってきているけど、見るのはつらいです(その後、自宅は本年1月に取り壊されました)。今年9月には復興住宅が出来る予定で、既に当選しているのでも、帰れるなら(健康でいられるなら)帰りたいけど…。もし帰ったら、うちでお茶を飲みましょう、浪江のみなさん！



福島県

特定非営利活動法人 アクセスホームさくら 理事長 渡邊 幸江さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：2月3日 「平成28年3月 広報なみえ掲載」

大切な仲間と共に“さくら”頑張っています！

利用者さんの声を聴き「やっぱり“さくら”は、なくせない」という強い気持ちを持って、避難先の二本松市で事業を再開したアクセスホームさくら。自立支援を理念に、明るさ・優しさ・本音でいられる大事な居場所になっています。



▲二本松市内に再開した新事業所にて

障がいがある方の中の日中の居場所づくりをと、浪江町手をつなぐ親の会が母体となってアクセスホームさくらが設立されたのは、平成13年4月でした。それから10年経っての震災。私はいわきに出張していて電話がつかないまま「津波が来るからみんなを送迎しないで！」と、祈りながら6時間かけて戻りました。事業所では、利用者さんの中に請戸の方がいるから送迎はできない、保護者が来るのを待とうと判断し、絶対迎えが来るからね！と、励ましていたそうです。夜は帰れなかった利用者さんと職員で車中に泊まりました。翌日、着の身着のまま津島



▲利用者の皆さんと一緒に

た。そのため、一回目の爆発の時は、すでに二本松。ガソリンがないピンチのお蔭でした。磐梯熱海に宿が取れ2泊はしましたが、20人程の在所帯ではこの先動けないと判断して、いったんバラバラに避難しようと決めました。職員で福島を避難先にしたのは2人だけでしたが、利用者さんの安否確認ができてから、県内外の避難先を回れるだけ回りました。「みんなに会いたい」「もう一度手話をやりたい」そんな声を聴いて、やっぱり「さくら」は、なくせない、目標を持って今まで積み上げてきた一人ひとりの課題をだめにしたく

小学校の体育館に避難しましたが、車のガソリンが少なくて不安を抱えての移動でした。何かあった時にガソリンがなくてはどうしようもないと思う、その日のうちに中通り

ないと思いました。実は、何度か開いていた理事会で事業は無理ではないかという話になっていたので、大切な仲間、居場所を守りたいとみんなでもう一度話し合い、震災の年の8月に二本松市の古民家で再開しました。それから、たくさんの方々の支援を受けて、新しく始めたお菓子作りや、震災前からの自動車部品の作業をやっています。平成26年11月に現在の新事業所に移転し、新たなスタートを切りました。ここには、居心地良くみんな明るい「さくらカラー」があります。利用者さんが毎日休まず、いきいきと活動できているのは幸せです。地元の人にも新しくさくらの仲間になってくれたのは嬉しいこと。この地域でこんなにも連携させてもらい、二本松事業所として前に進む事を決めました。ここはここで進んでいく、地域に根差した活動をしていく、そして浪江に戻れるようになって、必要ができたなら浪江でやる、それが新事業所を建てた時の決心です。アクセスホームさくらの所在地は浪江ですから。



清水 日出男さん(川添)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：2月5日 「平成28年3月 広報なみえ掲載」

みんなに言いたい “帰りましょうよ！ 浪江町、無くなるよ”



二本松市の仮設住宅で避難生活を送っている清水さん。震災前から勤めている一樹デイサービスセンターで現在も仕事を続けています。「解除になったらすぐに帰る。とにかく、帰りたい一心でいるから」と、思いを語られました。

震災の時は、一樹デイサービスセンターで畑仕事をしていました。原発事故が起きてから、センターの利用者を家族に引き渡すまでの10日間は、職員と一緒に猪苗代町の福祉施設の体育館に避難しました。暖房があつて良かったけど、食べ物がないのでね。それから、家族と二本松市の民家で生活したけど、引き渡さなきゃいけない。一樹デイサービスセンターが杉内多目的運動広場仮設住宅にできるのに合わせてここに来ました。あれから5年だね。

◆仕事のこと

朝6時にセンターを開けて、まきスラブで部屋を暖めて掃除をする。施設の修繕とか細々としたことを一手に引き受けてやっているから忙しいよ。それから、本宮と杉内のそれぞれで7反の畑にいろいろ作っているけど、土が良くなくて売れるものはでき

ないから利用者で欲しい人にあげているんだ。菊も作って、飾ったりあげたりしてます。年末は30年近く続けている門松作りをして、作りたい人には教えているよ。1年の計は元旦にある。元旦は大事だと思って、4か所のサポートセンターにきちつと飾っています。門松を見た利用者にも、ああ、今年も一年が始まるね、今年も立派だね、喜んでもらえるのが嬉しいね。

◆家族のこと

妻は週2回、センターでおしゃべりとか楽しんでます。娘はセンターの設立からのメンバーで、一言でいうと、よくやっています。毎日朝6時半に家を出て原町と浪江に通っています。大変だから原町に住まいを借りたらと言っても、お父さんとお母さんを2人にしておけないから、つて。親孝行過ぎますね。子ども3人、孫4人に恵まれて幸せだよ。

◆体調のこと・思い

去年、仕事で浪江に行った時、気持ちが悪くてしまい本当に辛くて、高瀬川に架かる橋から飛び込みたい衝動に駆られました。でも、そんなことをしたら、家族に負担がかかると思いとどまりました。そのあと、体調を崩して入院。イライラして、気を揉んでだめなんだ。今は、なんぼか良くなったけど、薬で生活してようなものだ。楽しみなんて考えない。早く浪江に帰りたい。解除になったらすぐ帰る。精神的に参っているから、帰りたい一心でいるから。補償金は、孫・ひ孫の代まで崇ってくるべ。私ら、お金の問題でなく、早く帰れることを考えてもらわないと。このまましていると、置き去りにされちゃうよ。店や病院は、原町やいわきに行けばあるから、何でも揃わなきゃだめってことはない。とにかく、解除になったら帰ると決意している。みんなに言いたい、帰りましょうよ。

